酒が出てゐるとみえ、宿屋の女中達の噪ぐ聲も時々聞えてきた。

春江はすさまじい波の音が耳について、なか〳〵寢つかれなかつた。

と、もう午前の一時頃になつて、長廊下の方でことり〳〵と足音がして、誰れかゞ入口の障子をそつと細目に開けて、そこから忍ぶやうな聲で、

『おい、はアちやん。春江さん。もう眠たのかい?』と、聲をかける。

春江は思はず枕から頭をあげて、そつちをみながら、

『誰あれ。』と、いふと、そこの障子には、褞袍を着た、だらしのない男の姿がぼんやり映つてゐる。よくみると、それは林であつた。

春江はこんなロケーション先へきてまで、林に絡はられるのかと思ふと、もうぅんざりしてしまつた。といつて、弱い女優の身では、素氣なくする譯にはいかないので、彼女はしぶしぶ起き上つて、

『何か用なの?』と、云ひながら、寢着のうへから羽織をはおつて、そつちへ出ていつた。

林は態と障子の側を離れて、そつと彼女の方へ手招ぎをしながら、

『ねえ、はアちやん。一寸明日の打合はせをし度いんだがね。こゝまで出ておいでよ。』と、囁く。

春江は仕方がなしに、眠つてゐる朋輩達に氣取られないやうに、こつそり廊下へ出ていつた。そして林のいふがまゝにずつと向ふの階子段の方までついていくと、林は四邊をきよろ〳〵見廻はしながら、そこの右手にある空いた座敷へいきなり春江を突き入れようとする。春江は笑ひながら、

『何をなさるのよ。私、厭だわ。人がみると變ぎやありませんの。』と、いつて、抗はうとしたが、林はそれを手で押へて、

『しツ、靜かに。まあ、とにかくこゝへ入つてくれよ。話しがあるんだから。』と、いつて、無理に彼女を座敷の中に押入れて向側の緣端の方へ連れていつてしまふ。そこの眞暗な中で、彼はいきなり春江に挑みかゝつた。

春江は咽せるやうな酒の匂ひをかぐともう氣が遠くなりさうであつた。

『あら、林さん、私、そんなことをしちや厭ですわ。厭ですツたら。あんた、此間の約束を忘れたんですの。こんな、こんなところでそんな亂暴なことをして、もし誰れかにみられでもしたら、見ツともないぢやないの。』

『いや、もう皆醉ツぱらつて寢ちやつたから大丈夫だよ。』と、云つて、林は醉つてゐるので、せいせい息を彈ませながら前後の見境ひもなく彼女に接吻を强要した。

春江は明日からのことがあるので、何んとかしてうまく遁げようと思つて、しきりに身を悶えながら、

『ねえ、林さん。私、ほんとに堪忍して下さいよ。このあひだもあんなにお約束をしたとほり、今度の撮影がすんだら、きつと私、なにしますから、それまで時間を與へて下さいましツたら。私、決して嘘は云ひませんから。』と、泣き聲になりながらいふ。

林はそれでも性急に手先ばかり働かして、

『君ももの分りの惡い女だなあ。あんまり手數をかけさせると俺や最後の手を出すよ。』

その時、向ふ廊下の方で無遠慮な足音がどたばた聞えて、誰れかゞ三人ほどつながつて此方へ上つて來た。外へ飲みにでもいつてゐた下廻り達とみえて、彼等はあけすけな笑談なぞを云ひ合ひながらゲラ〳〵笑つてゐたが、その聲は寢靜まつた二階中へ響き渡つていつた。

春江はその聲で林が思はず手をゆるめたので、その隙にばたばた遁げ出して、そのまゝ自分達の

寢部屋へ歸つて來てしまつた。林は覺えてゐろとか何んとか云つたらしかつたが、それも彼女の耳へは入らなかつた。

春江は自分の臥床へもぐり込むと、もう何んだか、體がぶる〳〵慄へて耐らなかつた。いかに何んでもあんな處で無體な眞似をしかけるとは、實に氣狂ひのやうな男である。彼女は林の顏を思ひ出すと、もうぞうツとして、舌の根がちく〳〵して來た。彼女は夜着の中へ頭までもぐつてどうかして動悸を落着けようと、あせつてゐた。

その時、ふと氣づくと隣りの臥床から熱い手が、にうツと伸びて來て、しきりにこそ〳〵かき探りながら、春江の二の腕のところをぴしツと抓つた。春江は聲を立てる譯にはいかないので、邪慳にそれを振拂ふと、小夜着の袖のところから今度は女の顏がにうツと入つて來た。

『春江さん　あんた棒先をきつたね。ちつと際どすぎるわねえ。』と、クス〳〵笑ふ。それは春江よりも前から蒲田にゐる水野百合子といふ三枚目の女優だつた。

春江はごろりと寢返りを打つて、

『知らないわよ。』と、云つたまゝ返事もしなかつた。

百合子はその脊中を後からくすぐつて、

『ねえ、春江さん。あんた、氣をつけないと駄目よ。あの林の奴と來たら、そりや女ツ食ひでね。綠蛇つて渾名がついてる位なんだもの。あんな奴につけ込まれたら、もうとてもあとが煩いわよ。』と、小聲で囁く。

春江は百合子の息が盆の窪のところへかゝるので、又ぞうツとしてしまつた。

七

その翌日は曇つてはゐたが、撮影には何の支障もない天氣なので、皆は朝から濱へ出て、寒い風の吹きしきる中で、さかんに活躍した。春江はともすると、濱風で白粉がおちてしまふので、そればかり氣にしながら、一生懸命になつて働いた。

春江の役である姚姫は井上正夫の扮する志士と氣脈を通じて、敵國の將校を誘惑する處が山であつた。井上の役の兵藤大佐は、開戰前から支那人に假裝をして、遠く蒙古の邊土まで入り込んでゐて、そこで敵國の作戰の機密を探るのが任務であつた。彼は或放牧民の中に囚はれの身となつてゐた蒙古の美姫姚姫と相知つて、つまりその姫を手先に使つて、偉勳を建てる譯なのである。

九十九里で撮る主な場面は、沙漠の場であつた。そこには俄かに驅り集めた牛飼ひがゐた。一夜造りの放牧民の小舍が彼方にも此方にも建てられてゐた。波のやうに起伏する砂丘を背景にして、キヤメラマンは巧みに沙漠の構圖を撮つた。

姚姫は土の壺に入れた酒をもつて來て、井上の兵藤大佐にすゝめた。その場面は幾分色模樣をもつて演じなければならなかつたので、春江にはまだ技量が足りなかつた。松山は額に汗を浮かせながら、しきりに形をつけてやつた。

林はその樣を意地の惡さうな眼で絕えずじろ〳〵みてゐたが、どうしても春江の體が思ふやうに動かないのをみると、彼はいきなりつか〳〵出しや張つて來て、

『はアちやん。何んだな、その態は。だから俺が云はないこつちやない。こんな役は君にや重すぎるんだよ。驅けだしの女優は役ばかり取りたがつて、キヤメラの前へ立つと、まるで手も足も出ねえぢやねえか。』と、がみ〳〵云ひながら、彼女の肩を邪慳に突いた。春江は不意をくつたので、砂のうへゝ膝をついてしまつた。

春江には急につんけんしだした林の腹はよく分つてゐた。で、もう素直にはい〳〵と彼の云ふことを聞いてゐた。

林はだん〳〵仕草が荒つぽくなつて來て、ともすると、胸を突いたり、膝を足で蹴つたりする。彼は昨夜までの林とはまるで別人になつてゐた。さうなると春江は一途に上つてしまつて、却つてトチるばかりであつた。彼女はもうはら〳〵しながら氣も浮づつてしまつてゐた。

井上はさすがに見兼ねて、

『いや、君、さういうたつて駄目ですよ。かういふ人は、却つて素人くさい仕草を買つてやらんけりや、値打ちはないのだ。私が形をつけてやるから、まあ、待つて下さい。』と、いつて、今度は熱心に仕草を教へてくれる。

春江は兩眼に一杯涙をためながら、キヤメラの前へ立つてゐた。もう一言何か怒鳴られたら、彼女は人のみてゐる前でもわツと泣き出したに相違なかつた。

その日はそれでもやつと無事につとめあげて、もう夕方になつてから皆は宿へ引上げてきた。と、その晩は村の網主の若旦那といふのが、是非一夕皆を招待し度いと云ふので、主だつた俳優達は村

でも一番の和泉家といふ料理屋へいく事になつた。無論さうした座敷は若い女優がお目當てなので春江も一緒にいくことになつた。

春江はまだ役の研究が足りないので、そんな席へ出ていく氣は少しもなかつたが、仲間外れになるのも變なので、仕方がなしに支度をした。

網主の若旦那といふのは、明治大學を出た立派な男で、こゝいらにしては珍らしいフアンであつた。で、自然話もはずんで座敷はわツ〳〵といふ騒ぎになつてしまつた。土地の藝者達も總上げといふ景氣なので、俳優達も隠し藝を出すやら、ダンスをやるやら、もう大變な賑やかさであつた。

十二時頃になつてやつとお開きになつたが、男の俳優の中にはよからぬ謀叛をたくらむものもあつて、歸りは各自ばら〳〵になつてしまつた。で、春江は百合子とたつた二人で、和泉家の女中に送られて宿屋へ歸つて來たが、宿の門を入らうとすると、そこへわざ〳〵待伏せでもしてゐたものとみえ、林が松林の中の暗闇からひよつこり出て來た。

『やあ、今歸るのかい。割りに早かつたぢやないか。』と云つて林はつか〳〵春江の傍へ寄つて來て

『ねえ、はアちやん。君、月がいゝから、一寸濱へいつてみない?』と、いふ。さういふ態度は晝

間とはまるで違つて、氣味の惡いほどやさしかつた。

春江はどうせ一緒にいけば林が何をするかといふことは分つてゐるので、困つたやうな顏で、

『え、でも、今夜は寒いから。』と、いふと、林は笑ひながら、

『はゝゝゝ。風流氣がないなあ。まあ、そんなことを云はずに一寸でいゝからつきあひ給へよ。何にもとつて食はうとは云やしないから、大丈夫だよ。はゝゝゝ。』

春江はいかないと云へば、又彼がどんなことをするか分らないので、到頭こは〳〵あとからついていつた。

濱へ出ると、雲の多い空からは、時々蒼ざめた寒月の光が冷たく洩れて來た。ひろ〳〵とした砂丘の面はほの白く輝いて、海はみえないのに、波の音が物凄く空をどよもしていつた。

林は、とある磯松の叢立つたところまでくると、そこへ立止つて、

『ねえ、はアちやん。こゝだと風が來ないから、そこの松の根つこへ腰をかけようよ。實に冴えたいゝ月ぢやないか。先刻撮影のあつたのは、あの砂丘の彼方だせ。』

そこからは見渡すかぎり砂丘の起伏が白々とひろがつてゐるばかりなので、波の音さへ聞えなけ

れば、まるで沙漠の夜と同じ感じであつた。村の灯もみえなければ、網小屋もみえない。ただ凍つた波のやうに、月光の下に輝いてゐる砂原が荒寥そのもののやうにつゞいてゐるばかりであつた。

林は先刻とは似てもつかぬやさしい聲音で、

『ねえ、はアちやん、まあ僕の隣りへ腰をかけ給へよ。そんな格好をして突立つてゐると、風邪をひくよ。はゝゝゝ。そんなに君、警戒しないだつていゝぢやないか。僕も、もう決して昨夜みたいな、あんな亂暴はしやしないよ。色氣と、仕事とは別だからね。今夜君、眞面目に仕事の話をし度いと思つてね。それで君をこんなところへ連れ出した譯なのさ。』

そんなことを云はれても、春江は無論氣を許す譯にはいかなかつた。先にどんな企らみがあるのか分らないので、彼女は林から五尺ばかり離れたところへそつと踞んだ。

林は春江の體へは手も觸れずに、ポケツトからスターを出して火をつけながら、何處かしんみりした聲で、

『ねえ、はアちやん。今日はほんとに君を窘めちやつて、僕、申譯ないと思つてるのさ。僕が昨夜のことを根に持つて、態と皆のゐる前で君に當つたやうに思つてるかも知れないが、僕の精神は決

してさうぢやないんだよ。今も云つた通り色氣と仕事とは違ふんだからね。』と、一々辯解するやうにいつて、春江の顏を覗き込みながら、

『ねえ、君、僕、實際今君の藝つていふ問題を心配してゐるんだよ。折角君も今度のやうないい役がついたのに、こゝで味噌をつけちやつたら、もうどうにもあがきがつかないからね。そこで僕も正直のところ君のためにや一生懸命になつてゐるんだよ。君はまだ知るまいが、實はね、君達が皆して和泉家へ出かけていつてからあと、宿ぢや大變だつたんだぜ。』と、先の氣を唆るやうな云ひ方をする。

春江も何かなしに胸騷ぎがして來て、

『まあ、大變なことつて、何んなんですの。』と、思はず息をつめて訊いたが、林はぷかり〳〵煙草の煙を月光の中へ吐き出しながら、

『さあ、そいつは一寸君の前ぢや云ひ憎いんだが、併し隱しといたつて、どうせ明日になりやバレるんだから、僕、饒舌つてしまはうね。ねえ、はアちやん。實はね、君、そのごたごたつていふのは、君の役のことなんだよ。松山さんの云ふのにはね、どうも衣川はあれぢや荷が重すぎて、どうしても井上先生にや喰ひつけまいから、いつそ友ちやんに振り直したらどうだらうつてかういふ譯なのさ。でね、立花君は氣が早いから、とにかくそいぢや友ちやんに來てゐて貰はうつていふんで、もう獨斷で浦田へ電報を打つちやつたのさ。』

春江ははツとして、

『まあ、ぢや私あの役はとられてしまふんですわねえ。そりや酷いわ。』と、いふと、林は笑つて、

『いや、さう驚くにや當らないよ。よくあることなんだもの。それも君がもう一倍氣を入れてやりやよかつたんだが、今日は正直のところ成つちやゐなかつたからね。それで、さすがの松山さんも少々お冠なのさ。』

『それであの、もう電報を打つちやつたんですの。ぢや友子さんが此處へ來るんですわねえ。』

『うむ、明日の夕方までにや來るだらうさ。さういふけど君、僕だつて隨分君のためにや辯護もしてみたんだぜ。だけど、かうなると松山さんの了見ひとつだからね。それだから僕が云はないこつちやないんだよ。平常から友ちやんの爪の垢でも煎じて飲んでおきや、こんなことにやならねえのさ。』

春江はもう泣くにも泣かれなかつた。今日はあゝまでに氣を入れて演つたのに、どうして自分の役はとられてしまふのであらう。自分では内心そんなに拙い出來ではないと思つてゐたのに、監督達の間では頭から問題にもなつてゐないのであつた。それを思ふと、春江はもう落膽して、口もきけなくなつてしまつた。

それから一時間ばかりたつて、とぼ〳〵宿へ歸つて來た春江の顏は、まるで喪心した人のやうに眞蒼になつてゐた。彼女はそのまゝ皆に挨拶もしずに、こそ〳〵臥床へもぐり込んでしまつた。

八

その翌日の午過ぎには、もう春江はたつた一人で佐原發の東京行の列車に乘つてゐた。彼女はその朝まだ薄暗いうちに、皆の寢息をうかゞひ窺ひそつと起きて、化粧道具を入れたバスケツトをもつて、態々庭先からこつそり松林の方へ忍び出てしまつたのであつた。役をとられると聞いては、いかに春江でももうどうにも我慢が出來ないので、彼女は前後の考へもなく東京へ歸つてしまはうと覺悟をきめたのであつた。

朝が早いので、村からの乘合自動車もまだ出なかつた。で、春江は半里ばかりの道を無我夢中で歩いて、六時の一番の汽船にやつと間に合つたのであつた。汽船で佐原まで歸つて、彼女はそこで一時間程待つて、東京行の列車に乘繼いだのであつた。

春江は三等車室の隅のところへ半分寢るやうに倚りかゝつて車窓から野や畑の景色ばかり見入つてゐた。彼女は汽船の中でさんざ泣いて來たので、もう涙も出なかつた。時々胸は息がつまるほど喉のところまでせき上げて來て、蟀谷のあたりがつうんと痛くなつてくる。彼女はそれをやつと一生懸命になつて押耐へてゐた。

考へれば考へるほど春江は情なかつた。今度こそはと思つてもう自分としては何も彼も投げ捨てたかゝつてゐたのに、その役は手もなく友子に取られてしまつたのである。それもいつそ初めつから、駄目であつたのなら、又諦めやうもあるのに、ロケーションにまで出て來てゐながら、出先で役を振變られるといふのは、何んといふ不面目極まる話であらう。而も相手は自分の競爭者である友子である。春江はそれを思つたゞけでも、もう死に度いほど口惜しかつた。

列車が我孫子を通過する頃には、春江もいくらか氣持が靜まつてきた。どうせ自分にはキヤメラ

の前へ立つ資格はないのである。あれほど一生懸命にやつてみて、それで駄目なものなら、もう自分は到底この方面で成功する見込はないものといつていゝ。昨日の撮影なぞも自分としては相當自信もあり、自惚れもあつたが、併しそれも今となつては多愛のない夢である。

その時、春江の胸には、いつぞや小説家の原田から意見をされた時のあの言葉が膽にこたへるほどはつきり思ひ出されてきた。才能といふ問題、資力といふ問題、それから體といふ問題、小説家の原田はさういふ風に細かく分けて、一々適切な言葉で不心得をさとしてくれた。その時には、まるで耳にも入らなかつたが、今になつてみると、全く思ひ當ることばかりである。貞操を塵芥のごとくに捨てなければ、到底成功の出來ない道、……あなたは相當の家庭に生れて、しかも充分教育も受けてゐながら、何故そんな荆棘の道を我から好んで歩まうといふのか。それは唯單に虚僞な、空疎な生活に對するあこがれに過ぎないといつて原田は彼女を頭ごなしに罵りさへした。

春江は今となつてみると、全くそれが眞實の言葉であつたことを痛いほどはつきり感じた。家を捨てゝまでこんな境涯へ落ちて來た自分の淺墓さが耐らなく情なくなつて來た。女優として社會にその名を唄はれようなぞと思つた自分は大馬鹿ものであつた。春江は俄かに惡夢がさめたやうな氣

持になつて、すつかり心が白けてしまつた。

『お父様。お母様。どうか堪忍して下さいまし。……』彼女は咽び泣きに泣きながら口の中で叫んだが、喉もとへ込み上げてくる涙は云ひやうもないほど苦かつた。

上野驛へ着くと、春江はそこで省線の電車に乘りかへて、眞直に蒲田へ向つた。やつとのことで家へ歸りついたのは、もう夕方の六時過ぎであつた。

春江がひよつこり庭口から入つていくと、弟の榮次郎は丁度その時、向ふの暗い板の間のところでしきりにごし〳〵味噌をすつてゐたが、きよとりした顏で、

『あ、姉さん。……』と、叫んで、呆氣にとられてゐる。

春江はその聲を聞いたゞけでも、もう胸が一杯になつて、默つてバスケツトを提げたまゝ家の中へ上つて、火鉢の前へがくりと腰を落としてしまつた。

榮次郎は摺古木をおいて、此方へのそ〳〵出て來ながら、

『姉さん、どうしたの。もうロケーションはすんだの。』と、まだ腑に落ちないやうな顏をしてゐたが、春江は涙聲で、

『榮ちやん。私ね、私ね、もう女優なんか止めるわ。私もうしみ〴〵厭になつちまつたわ。』と、云つて、もう我慢が出來なくなつてしくり〳〵泣き出してしまふ。

榮次郎も涙ぐんで、そのまゝぼんやり突立つてゐたが、やがて姉の傍へ坐つて、その肩へ手をかけながら、

『姉さん。もう何んにも云はなくたつて、僕にやちやんと分つてゐますよ。僕もきつとそんなことになるだうと思つてゐたんです。もう此間から僕、それを感じてゐたんですよ。』

春江はとめどもなく嗚咽が込上げてくるので、自分でももどかしさうに胸をおさへて、

『ねえ、榮ちやん。ほんとに、ほんとにあんまりなんだもの。私、こんな口惜しいことはないわ。』と、いつて、役をとられた次第をきれ〴〵に語る。

榮次郎も悲憤の面色をしてゐたが、すつかり聞いてしまふといぢらしく筒袖で涙を拭いて、

『姉さん。僕、あの林つていふ人大嫌ひなんです。あの人が姉さんを苦しめてゐるのが、僕は全く見てゐられなかつたんです。僕今だからいふけど、此間の晩、僕、あんまりなことをいふから、この火鉢を叩きつけてやらうかと思つたんです。あの人は姉さんを侮辱してゐるんです。』

『侮辱してゐるだけならいゝんだけど、あの人ツたら、私の、私の希望も何ももうすつかり叩きつぶしてしまつたんだもの。私、一生あの人を恨むわ。』と、涙を呑んで、『だけどねえ、榮ちやん、私、何もかも放つておいて、無斷で遁げて來たんだから、このさきどんな恐い目に逢はされるか分らないわ。もうどうせ私、これツきり撮影所へも行かないつもりだけど、さうなるとこのまゝ蒲田でのめ〴〵しちゐられないわねえ。こんなところにゐたらそれこそ滅茶々々にされてしまふわ。私、それが何よりも恐いのよ。』

榮次郎はもう子供らしく勢ひ立つて、

『だから姉さん、僕がいつもいふやうに、こんな處はもう引拂つて、東京へ出ていきやいゝぢやありませんか。東京はあの通り廣いんだもの。何處か小さな二階でも借りて隱れてゐりや、どんなことをしたつて見附かる氣遣はありやしませんよ。ねえ、姉さん。さうしませうよ。さうすりや僕だつてどんなに勉强が出來るか知れやしませんからね。』

春江はやつと涙を拭いて、

『だけど、右から左にいゝ家が見附かるか知ら。』

『そりや姉さん、見附かりますとも。學校の近所にや、いくらだつて貸間はありますよ。僕これから早速いつて探して來ようかな。一寸心當りもあるから。』と、榮次郎は一本氣に、もうそわ〳〵しだす。

春江も全くのところ、かうなつては一刻も早くこの蒲田を引拂ふのが得策だと思つた。なまじ、うか〳〵してゐて、もし撮影所の方からでも何か手が廻つたら、もう動きがとれなくなるのは分つてゐるのである。それに林にはどんなことがあつても、これからもう二度と再び顏を合はせ度くはなかつた。昨夜はあんなお爲めごかしなことを云つてゐながら、今度のことも内々はきつと彼の差金に相違ないのも彼女はよく知つてゐた。彼は役を振りかへておいて、今度は裏から廻つて、この自分を是が非でも口說き落とさうとしてゐるのに相違なかつた。その證據には、昨夜ももし自分の云ふことを聞けば、又何んとかして役がもとへ返るやうに骨を折つてやるといふやうなことをしつこくほのめかしてゐた。その執拗さには、春江もほと〳〵弱りきつてしまつたのであつた。それ故もしこのうへ林に絡はられるやうなことがあつたら、もう春江は自分では防ぎやうがないのであつた。それを考へると、彼女はとてもじツとしてはゐられなかつた。

姉弟はそれからいろ〳〵相談しあつた末、とにかく今夜のうちに行先を探しておいて、明日の朝早くこゝを引拂つてしまはうと決心をきめた。で、春江はすぐに榮次郎に東京へいつてもらふことにした。

榮次郎はやがて支度をして、

『ねえ、姉さん。そんなに心配することはありませんよ。姉さんがい〻時に眼がさめてくれたんで僕、こんな嬉しいことはないなあ。全く活動女優なんていふ職業は、眞人間のするもんぢやありませんよ。月に二十圓かそこいらのお金で體をしばられて、こんな下らない話はないぢやありませんか。それよりも姉さん。ちやんとした會社へでも出て働いた方が、お金も取れるし、體も樂だし第一厭な人間とつきあはないだけだつてどんなに氣持ちがい〻か知れやしませんよ。人間は何をいつたつて、正しく、眞面目に働いていくのが一番い〻んですもの。』と、榮次郎は袴の紐を結びながら、せか〳〵緣先から戸外へ出ていつてしまつた。

たつた一人になると、春江はもう一途に心細くなつて、體中の力がすつかりぬけてしまつたやうな氣持ちになつて來た。一年あまりの月日をまる〳〵無駄にしてしまつたのかと思ふと、それが今

更のやうに口惜しくて耐らなかつた。それだけならいいが、今日から先のなりゆきを考へると、もう息がつまるやうに悲しかつた。どうせこのまゝでは濟まないに極つてゐるので、これから先の林のことも氣にかゝつて耐らなかつた。それよりも第一、自分は明日からどういふ方面で身を立てゝいかう。何を賴りに生きていかう。まるで目的のなくなつてしまつた春江は、俄盲になつたやうで、事實において手も足も出ないのであつた。彼女は全く泣くにも泣かれなかつた。

春江はさうやつたまゝ薄暗い中でいつまでもしよんぼり考へ込んでゐたが、そのうちに朝から何んにも食べてゐないのに氣がつくと、急に腹が空いて耐らなくなつて來た。彼女はやがて力なく起ち上つて、戸棚を探して、佃煮と豆を出してきて、それでぽそ〳〵冷飯をたべだした。榮次郎は、彼女が留守の間もきちんと世帶をもつてゐて、茱葉の一片でも放ツたらかしておくやうなことはしなかつた。春江にはそれが何よりもいぢらしく思はれるのであつた。

春江はあんまり疲れてゐるので、飯をすますとそのまゝ横になつたが、しばらくすると我にもなくついうとゝと淺い眠りに落ちていつてしまつた。彼女はその夢のなかでもいつかキヤメラの前に立つてゐた。

九

春江達姉弟が、その翌日引越していつた先は、神田の錦町にある小さな洋服店の二階であつた。洋服店といつても至極小躰な店で、學生の制服とか、きまりきつた子供服とか、さういつたあんまり利益の上らない仕事ばかりやつてゐる家なのであつた。表には飾窓もなければ、サンプル棚もなく、上框の土間へミシン臺をおいて、主人自ら裁縫をやつたり型つけをやつたりして、その暇に方々の得意先へ註文を取りに廻つてゐた。主人の他に、福島訛りまるだしの裁縫工が一人と、脊丈のちんちくりんな小僧が一人ゐた。

榮次郎は學校友達の一人から、そこの家を紹介されたのであつた。早速いつてみると、貸さうといふのは、二階の六疊で、天井の低い、張壁のはげ落ちた、いかにも貧乏ツたらしい部屋ではあつたが、月たつた七圓で貸すといふので、その値段に惚れ込んで、その場ですぐに話を極めてしまつたのであつた。

引越しも頗ぶる簡單であつた。荷物といつても、柳行李が二つと、世帶道具と、小さな本棚や机

があるつきりなので、彼等は荷車を一臺賴んで、それへ全部積んでしまつた。榮次郎はそれでも途中が心配だといふので、荷車の後押をしながら、歩いて東京へ出ていつた。春江は春江で、持てるだけのものを持つて、これは電車で神田驛までやつて來た。

二人は家を出る時、もし撮影所から何かいつて來ても、決して行先を明かしてくれるなと、くれぐれも賴んでいつた。尤も用意周到な榮次郎は、そこの家へは引越していく先をはつきり云はなかつたのであつた。

神田へ引移つてからの姉弟の生活は、今迄とはころツと變つてしまつた。春江は何んにもすることがないので、一日家にごろ〳〵してゐた。自然さうなると、世帶向きのことも弟ばかりに任せておくことは出來ないので、彼女は自分も米をといだり、煮たきをやつたりして手傳つた。あんまり所在がないので、それも結局暇つぶしになつてよかつた。

榮次郎の方は、學校も限と鼻の間だし、それに時間にひどくゆとりがとれて來たので、もう大嬉びであつた。彼は端でみてゐても却つて心配になる位、必死になつて勉强をやりだした。夜は殆んど一時二時迄、本を讀んだり實驗をやつたりしてゐた。

その年もいつの間にか暮れて、寒い正月がやつて來た。此頃ではもう全く居喰ひをしてゐるので姉弟が郵便局へ預けてゐた金は、一日一日に手薄になつていつた。それに引越しで思はぬ費用がかさんだので、それも大きな打擊であつた。春江はもう氣が氣ではないので、朝起きるから、晩寢るまで、どうにかしなければと、そればかり口癖のやうに云ひ續けてゐた。

春江は一生懸命になつて、自分の柄に合ひさうな職業を探して歩いた。足を棒にして歩いても、どうも思はしいのがなかつた。どれもこれも、帶にや短かし、襷にや長しで、全く話にならなかつた。何の彼のと選り好みの出來る程、餘裕のある體ではないので、もう何んでもいゝから、月に二十圓なり、三十圓なりの金がとれゝばいゝと思つて一心になつて探して歩くのだが、扨てどこにもこれといふ職業はなかつた。

その間には、女事務員の口や、謄寫版の外交員や、文房具屋の帳つけや、製紙倉庫の整理係りやさういつた各種の仕事はあつた。しかし先へ訪ねていつてみると、どれも、これも信用の出來るのはなくて、女だけにうつかり飛び込んではいけないのであつた。春江はもう諦めて、いゝ加減なところで納まらうと思つても、几帳面な榮次郎の方が心配して、どうしてもうんといはなかつた。

中でも一番芽のありさうなのは、派出婦の口であつた。それは神保町にある神田婦人會が經營してゐる團體で、そこへいつて稼げば、手數料を差引かれても、一日一圓十錢にはなるといふ話であつた。それに第一、食事が向持ちなので、大變に樂さうにみえた。しかも派出される先は自由に選擇していゝといふ條件なので、春江はこれならばと思つてゐた。

春江は足の序にその婦人會へいつてみた。向ふでは名簿に登錄させたあとで、所定の入會費をとつて、さてそのあとで派出先の申込表をみせてくれた。その時には、約十口ほど書いてあつたが、しかし大半はもう塞がつてゐて、中ではまあ猿樂町の村越といふ家が一番よさゝうであつた。

春江は會からの添書を貰つて、早速そこの家へいつてみた。と、それはみすぼらしい下宿屋で、石炭の會社へ出てゐるとかいふ、肺の惡さうな中年の男の看病をさせられるのであつた。春江は寢臭いやうな日當りの惡い六疊へ入れられると、もううんざりしてしまつた。その下宿人はもう長いこと寢てゐるとみえて、床摺れがひどくて、とても素人では手がつけられなかつた。春江はとても辛抱が出來ないので、その日のうちに逃げ歸つてしまつた。

その次にいつたのは、今川小路にある相當な質屋であつた。そこはつひ三月ばかり前に內儀さん

が死んだので、二人の子供の守をしながら、家政をみてやればいゝのであつた。家も綺麗だし、體も樂だつたので、春江はこゝならばと思つて、そのまゝ三日ばかりゐた。主人といふのは、法政大學出の三十五六の男で、口數をきかない、靜かな男だつた。

そこの家へゐついてから五日目の晩の、丁度午前の二時頃に春江は突然、自分の寢てゐるところへ忍び込んで來た一人の男を發見した。彼女はてつきり盜賊だと思つて、大きな聲をたてたので、その男は大慌てに慌てゝこそ〳〵と廊下の方へ逃げていつてしまつたが、その後姿をみると、どうやらそれは、そこの家の主人らしかつた。春江は氣味が惡くなつて、その翌朝早速暇をとつてしまつた。

その晩、榮次郎が學校から歸つてくると、春江はもう自棄になつたやうに、

『ねえ、榮ちやん。あんな派出婦なんてものも、やつぱし駄目だわね。私、まんまと五圓損しちやつたわ。』と、投げ出すやうにいふ。弟の前で話せる話でもないので、彼女は質屋から歸つて來た理由はおくびにも出さなかつた。

榮次郎も力ぬけがしたやうに、

『さうかなあ。矢張り駄目ですかねえ。そりや困りましたね。』と、嘆息を吐く。
春江はもう何か決心をきめてゐるやうな顏で、しばらくの間云ひ澁つたあとで、
『ねえ、榮ちやん。私もう自分ぢや腹をきめてるのよ。どうせもうかうなりや、脊に腹はかへられないわ。私、いつそ思ひ切つて、カツフエの女になつちやはうかと思つてるの。』
その七八日前から、階下の內儀さんがしきりにカツフエへ出ろといつて煩くすゝめるので春江も實は少しづつ心が動きかけてゐるのであつた。內儀さんが自分で紹介しようといふ先は、內儀さんの同鄕のものが經營してゐる店であつた。それは裏神保町にあつて、あすこいらにしては客種も品がよく、家の看板も新らしいだけに立派であつた。そこは半日づとめで、日に二圓や三圓の貰ひはお茶の粉だといふ話であつた。
榮次郎は默つて火鉢の炭火をみつめてゐたが、ふツとどうしたのか涙ぐんで、
『姉さん、姉さんも到頭そんなことを考へるやうになつちやつたんですねえ、あゝ、僕しみじみ厭だなあ。』と、涙聲で呟く。
春江は顏を背けて、火箸ばかりいぢくりながら、

『だつて榮ちやん。いくらあんたが、そんなことをいつたつて、もうかうなりや何うにもならないぢやないの。それに私だつて、もう映畫女優までして來た體なんだもの。いくらこれから立派に身を立てようと思つたつて、もうどうせあんた、世間がそれをさせてくれやしないわ。』
『姉さん、又それをいふ。僕はそれを云はれると、實に情なくなつてしまふんですよ。姉さん、いくら映畫女優をして來たからつて、そんなに姉さん、自分で卑屈に考へる必要はないぢやありませんか。今はかうなつても、僕達は仙臺の丸仙の子なんですもの。』
『そんなことを今更いつたつて、何んになるもんぢやないわ。いくら丸仙の子だつて、この東京へ出て來ちや、一人だつてさう思つてくれる人はありやしないわよ。もう榮ちやんも、そんな夢はお捨てなさいよ。そんなことを考へて、いぢ〳〵してゐるだけ無駄だわ。私もね、隨分いろんな風に考へぬいてみたけど、どうせもう落ちていく先はちやんと極つてると思ふわ。それが運命だと思へば、もう仕樣がないわ。』
『だつて姉さん、そりやいけませんよ。そんな風に考へだしたら、もう姉さん、明日ツから墮落してしまひますよ。』

『いゝえ。私、それだけは大丈夫よ。あゝやつて蒲田にゐてさへ、體には傷をつけなかつたんだもの。私も此頃ぢや世間てものもよく分つたし、大概なことをしたつて、間違ふ氣遣ひはないと思ふわ。それに階下の內儀さんの話ぢや、あすこの家は大變客種がよくて、重に學生ばかりだつていふから、私、自分さへしつかりしてりや、何も恐いことはないと思ふわ。第一今の私で、月に六十圓の七十圓のつてお金になる仕事はもう他にやありやしませんもの。』

榮次郎は默つて、考へ込んでゐた。

春江はふツと泣き聲になつて、

『ねえ、榮ちやん。それにね、私、實はもうすつかり考へが變つてしまつたのよ。此間まではどうにかして、自分が何かの方面で成功して、せめてお父樣のお顏を立てようと思つてゐたけど、やつぱり女ぢやとても駄目だわねえ。それが私にもよく分つたの。でね、私、今度はもう自分が犧牲になつてね。あんたを何うにかして立派な人間に仕立て上げたいと、さう思ふやうになつたのよ。それを思ふと、私、全く夜の眼も眠れないわ。それをするにや、先づ第一にお金を取らなけりやならないでせう。月々不自由するやうぢやあんただつておち〳〵してゐられないし、第一勉强に身が入

らないものねえ。だからね、榮ちやん。あんたもう私のことには干涉しずに、後生だから今は眼をつぶつてゝよ。私、その代り一生懸命になつて働くわ。自分さへ正しく身を持つてゐりや、どんな卑しい仕事をしたつて、誰れに恥ぢることもないんですもの。その點では私昔より却つて勇氣が出て來たわ。』

榮次郎はしきりと泣いて、

『姉さん、僕勿體ないなあ。姉さんに、そんなことを云はれると、僕……』と、云つて、鼻をすゝるのを、春江は手で押へて、

『何によ。榮ちやん。男の癖に、そんなに泣くもんぢやないわ。どうせかうなるのが、私達の運命なんだもの。今このまゝくじけてしまふのは、あんまり意氣地がなさすぎるわ。もう何んでもどし〳〵やつてみることだわね。榮ちやん。私、あんたの爲めなら、どんな辛いことでもするわ。そのかはり、あんたも、もう一生懸命になつて勉强してね。さうして、立派な人間になつてよね。私、あんたがそれをしてくれさへすりや、死んだつて惜しかないわ。』さういひながら春江も、おい〳〵泣いてゐた。

階下では、急ぎの仕事があるとみえて、こんな夜更けになつても、ミシンの音が呟くやうにしつきりなしに聞えてゐた。そのもの音にも喘ぎ悶えてゐる悲しい生活の聲がひびいてゐた。

十

春江はそれから間もなく、裏神保町のカツフェ・ウイステリアへ初心な女給となつて現はれた。朝から脂粉に身を窶して、浮いた言葉で客を迎へする蓮葉な境涯へわれから身を落としてしまつたのであつた。

春江はあれほど覺悟をきめてはゐながらも、いざとなるとやつぱり馴れないことなので、辛いことばかりであつた。併しエプロンがきちんと身につくやうになる時分には、もう彼女も表面だけはさうした萍の女になりきつてゐた。客に笑談なぞを云はれても、へどもどするやうなこともなく手なぞを握られても平氣やり返す位の度胸はいつの間にか備はつて來た。

そのカツフェは實際相當に客種はよかつた。比較的金廻はりのいゝ學生が主で、その他には大きな書店の店員や、會社員といつたやうな種類の客がやつて來た。從つて、さう亂暴をやるやうなものもなく、惡くしつツこい客もゐないので、春江は割合に勤めよかつた。それに顔馴染みが出來るに從つて貰ひもだんゝよくなつて來た。日に二圓平均位にはなつた。そこで一番働きがしらの房枝なぞといふ女は、月に百圓からうへの收入があるといふ話であつた。春江もそれに希望を得て、一生懸命になつて働いた。

或晩のこと、――それはもう春江がウイステリアへ來てから約十月ばかり經つてからのことであつた。――春江はその日は階上番にあたつたので、午後の五時から交替で店へ出た。その晩は吹く風が寒くて、妙に客足が遠いので、八人ゐる女給達は隅の方にある溜りへ入つてこそ〳〵世間話をやつてゐた。

そこへ階段をコツ〳〵上つて來る靴音が聞えて、二人の客が入つて來た。とみると、それは勞働者のやうな異樣な服を着た四十四五の男と、もう一人は鼈甲緣の眼鏡をかけた、脊の高い和服の男であつた。春江は番なので、愛想よく、

『被來いまし。』と、迎へて、そのまゝ立つていつたが、二人の男は窓際の卓へいつて向ひ合ひに腰を下ろす。洋服の方の男は、見すぼらしい風體に似合はず、すぐにポケツトから贅澤な金口煙草

を取り出して、火をつけながら、連れの男に、
『どうです。あなた、酒をやりますか。』と、重い訛りをひびかせながらいふ。春江はその聲でふツとその男の顏をみると、それは思ひもかけない俳優の井上正夫であつた。しかも、もう一人の男は春江が上京するとすぐさま訪ねていつた例の原田といふ小說家であつた。春江はあんまり意外なので、俄かに胸がどき〳〵して、顏がかツと熱くなつて來た。
原田も煙草を取り出して、
『さあ、ウヰスキイでも一杯やるかな。ねえ、君、ジョニイウォーカーの黑はあるかね。』と、云つて、ひよいと春江の方をみたが、彼もその時見覺えのある女だなといふやうな眼つきをして、思はずじいツと春江の顏をみた。
春江は我にもなく顏を伏せて、
『は、御座います。』と、答へたが、彼女はもう穴へも入り度いやうな惑亂を感じてゐた。
井上の方は食べものを食べるといふので、春江はおど〳〵しながら註文を聞いて、やつと溜りの方へ歸つて來た。それをコツク場へ通して、そのあとで酒場の方へ酒を取りにいつたが、その間も

春江はどうしても落着けなかつた。
二度目に酒をもつて卓へいくと、井上もやつと氣がついたらしく、例の地太い、おどけたやうな聲で、さも驚いたやうに、
『やあ、君は、衣川さんぢやないか。』と、顏をみる。
春江はもうひと縮みになつて、
『先生。しばらくで御座いました。』と、仕方がなしに、丁寧に挨拶をした。
小說家の原田もにこ〳〵笑ひながら、これもやつと春江のことを思ひ出したとみえ
『やあ、やつぱり君だつたのか。すつかり變つてしまつたねえ。』と云つて、しげ〳〵春江の風つきを見上げ見下ろしながら、『いや、君が蒲田へ入つたといふ噂は、誰れからか聞いたが、とう〳〵君もこんな處へ落ちて來てしまつたんだねえ。』と、いたましさうにいふ。
春江はもう一言もなかつた。
井上は自分で平野水を注いで飲みながら、
『それよりも、君は一體どうしたですか。もうあれから一年にもなるが、さつぱり消息が聞えんの

で、蒲田ぢや今もつて一つ話になつてをるですよ。あれからずツとこゝにをるですか。』

春江は無理に笑つて、

『いゝえ、あの、私、あれから二月ばかりたちましてから、此方へまゐりましたんですの。もうすつかり隠れおほせたつもりでをりましたのに、私、ほんとにお恥かしう御座いますわ。』

『いゝや、恥かしいことなぞないですよ。それで、あの時には、何うして、あんなに急にどゝんでしまつたですか。何んでも撮影所では、自殺でもしたんぢやないかというて、皆で非常に評判をしてをつたが、……』

『自殺なんぞする勇氣があれば、私、あんなことをして皆さんに御迷惑をかけやいたしませんわ。私、いろ〳〵事情がございまして。』

『ふむ、何か色ツぽい話でもあつたんですか。』

春江もどうやら勇氣が出て來て　艶めかしく笑ひながら、

『いゝえ。どういたしまして。そんなことならよろしいんですけれど、私、實はあの、あの時に役がはりの話しがありましたもんですから、それで……。』

『役がはり？』と。井上は暗に落ちないやうにいつて、『そんなことがあつたですかなあ。私はちつとも知らんですよ。』

『まあ、ぢや、あのあと友子さんが撮つたんぢやないんでございますの。』

『いや、友子さんは撮らんですよ。あんたがどゝんでしまつたんで、もうあの役はあれだけにして筋をいぢつて貰つたんです。』

春江は大業な表情をして、

『あら、まあ、さうなんで御座いますの。私實はね、あの時、あんまり役の出來が悪いといふんで、友子さんと代れつてさう云はれましたんですわ。それで私、あんなことをしてしまつたんですの。』

『はゝゝゝゝ。ぢや君もやつぱりあの林にしやくられたんだな。彼奴もあくどいことをしをるなあ。それぢやあの畫もまだみんのですか。』

『え、私、見るのも腹が立ちますから、あれからはもう彼の畫のビラさへ見ませんでしたの。』

『はゝゝゝゝ。えらい目に逢つたなあ。そりや氣の毒だ。そりや君、あの林が途中でいゝ加減なこ

とをした相違ない。彼奴は實に惡い奴だつたからなあ。』

春江はその時料理が出來たので、それを井上の前へ持つていきながら、

『あの、先生。それで、今林さんは何うしてをりますの。相變らずやつてをりますの。』

井上はフォークを取り上げて、

『いや、あれはもう今年の正月、首になつたですよ。』

『まあ、首に？』

『うむ、あれはね、何んでも詐欺をして、友達の金をとつたとかいふんで、たしか今は食ひ込んでをる筈だ。蒲田でもフヰルムをごまかしたり、ロケーションの雜用の頭をはつたり、碌なことはしてをらなかつたんだ。仕樣のない奴でねえ。』

さういはれると、春江は何かなしに、いゝ氣味だと思はずにはゐられなかつた。あんな奴はどしどし警察で上げて、牢屋へ打込んでしまふ方がいゝんだ。さう思ひながら、彼女はぼんやり卓の傍へ立つてゐた。もう大分月日が經つて、自分の境遇もすつかり變つてゐるので、彼女はあの時のこともさまでには胸に殘つてゐないのであつた。

小說家の原田はちび〳〵ウヰスキイばかり飲んでゐたが、やがて、

『どうだね、君、かういふところにゐるのと、蒲田にゐるのとどつちが愉快だね。』と、話しかける。

春江は嬌態をして、

『そりや私、かうやつてゐる方がどんなに樂だか知れませんわ。もう蒲田には私、こり〳〵いたしましたの。』

『はゝゝゝゝ。いや、それだから僕があの時にも忠告したのさ。どうも若い女は一途でいかんよ。併しかういふところにゐるのも、僕はあんまり贊成しないね。まあ、あんた達は若いんだから、隨分面白いこともあるだらうが……』

『あら、先生、先生までがそんなことを仰有つちや、私、いやで御座いますわ。私、もう面白いことなんか、これッぱかしもありませんの。でも、私だつてやつぱし生きていかなけりやなりませんからねえ。』

『ふむ、生きるか。その言葉の誘惑が一番恐いんでねえ。』と、原田は一寸眞顏になつて默り込んでしまつた。

さうしてゐるうちに、二組ばかりの客がどや〳〵と上つて來たので、春江も井上達の卓にばかりはゐられなくなつてしまつた。朋輩達も井上と知つて、眼ひき袖ひきこそ〳〵耳打ちしながら、態とその卓の傍へいき度がつた。春江もこゝへ來てからは以前蒲田にゐたことなぞはおくびにも出さないので、皆に何にを聞かれても知らん顔をしてゐた。

井上達はそれから一時間ばかり何か二人でひそ〳〵話し合つてゐたが、やがて春江をよんで勘定を命じた。勘定がすむと井上は、

『ねえ、衣川さん。君がこゝにをるんなら、又來ますよ。』と眞面目くさつていふ。

春江はそわ〳〵して、

『は、どうぞまた。あの、先生、その代り、どうかお願ひで御座いますから、あの、私がこゝにをりますこと、誰れにも仰有らないで下さいましな。私、知つた方にお眼にかゝるのが、何よりも恥かしいんですもの。』

井上はむつゝりしながら合點いて、そのまゝ原田と二人で階段を下りていつてしまつた。原田は別れるまで唯にこ〳〵笑つてゐて、何んにも云はなかつた。

十一

井上も原田もそんなことを云つてゐながら、それからは一度も顔をみせなかつた。そのうちにその年も暮れて、まる一年の月日を春江はそのカツフエで暮してしまつた。毎日毎夜若い男達の相手になつて、表面は浮々しながら日を送つてゐるので、その間には面白いことも、悲しいこともあつたが、併し春江は事實に於て、體だけは清くもつた。さうした稼業をしてゐると、誘惑の手は隨分多かつたが、それでも春江は器用にその間をくぐつて通つた。だん〳〵客摺れがしてくるにつれ、容貌やもの腰もあくぬけがして、男の氣をひくやうになつていくので、春江はそのカツフエでもいつの間にかスターになつてしまつた。それだけに、どうにも拔き差しの出來ないやうな場合が次第に多くなつていつた。

一番春江にのぼせて通つてくるのは、筒井といふ明大の學生であつた。それは明大の野球チームの選手で、男振りもよし、態度も女好きのする好青年であつた。故郷は福岡で、生家は有名な素封家だとかいふ話で、カツフエへ來ても、實に綺麗に金をつかつた。カツフエでも彼に思ひを寄せ

てゐる女給は二人や三人ではなかつた。

野球の試合があると、彼はきまつて、その入場券をもつて來てくれた。春江も三度に一度は斷われないので、公休日を繰り上げてもらつて見物にいつたりしたこともあつた。店でも大事な客なので、主人も大概なことは大目にみてくれた。

春江はそれでも何うしても筒井が好きになれなかつた。彼が凛々しいユニフォームを着て、フキールドへ立つてゐる姿は、女學生達の間でもすばらしい人氣で、寄るとさはると世間では彼の噂をしてゐたが、春江はどうしたものか、それほどに彼を大事に思ふことが出來なかつた。男の思ひが熱烈になつてくればくるほど、彼女は却つて恐くなつていくばかりであつた。カツフエでも筒井が姿を現はすと、もう女給達はわうわといふ騒ぎであつたが、春江はさういふ時には、成る可く人に番をゆづるやうにしてゐた。さうされゝばされるほど男は耐らなくなつていくらしかつた。

或晩のもう十時過ぎた時分である。筒井は五六人の學生を連れて、ぐでんぐでんに醉ツ拂つて、カツフエ、ウイステリアへやつて來た。連れはいつも彼を取卷いて飲んで歩いてゐる連中で、店へ入つてくると、他の客の迷惑も顧みずにわい〳〵騒ぎ出した。その日は慶明兩大學の決勝試合があつ

て、明大の方は運惡く二點の差で敗退したので、學生達はひどく感傷的になつてゐた。殊に筒井はラツキイセヴンに、ショート越えのフライをミスしたのが敗因になつたといふので、もう端でみてゐても氣の毒なほど自棄になつてゐた。

皆は應援歌をうたつたり、おけさを唄つたりしながら狂踏亂舞して、どうかして筒井の氣を浮かせようとしてゐたが、ともすると彼が涙ぐみさうになるので、皆してやたらと彼にウヰスキーを飲ませてしまつた。中でも島津といふ彼の親友は、しつかりと筒井の肩を抱いて、青年らしい興奮した言葉で、しきりに彼を慰めてゐた。島津も醉つてゐるので、春江を傍へ引きつけて、

『おい、春江さん。筒井のデスペレエトな氣持ちを慰めてくれるのは、君たつた一人だよ。おい、しつかり賴むぜ。せめて手でもぐツと握つてやつてくれツ。』と、云つて、春江の二の腕を痛いほどつかんで、どうしても離さなかつた。

春江はもう何うしていゝか分らなくなつて、唯ぼんやりしてゐた。うつかりしてゐると、筒井が彼女に飛びついて來て、熱狂的に接吻をしようとするので、彼女はそれを體よく外すのにひと骨折りをした。

十二時になつて、そろ〳〵店を閉める頃には、筒井はもう椅子から立てないほどぐづ〳〵に醉ひ痴れてゐた。彼は春江の肩へしがみついて、少時の間も離さなかつた。そのうちに、連れの中の一人は酒癖が惡いのでやがて醉狂をはじめる。ガラスをこはしたり、灰皿を放つたりしてゐるうちはよかつたが、しまひにはビールの壜を振り廻はしたり、ナイフを壁へ突き立てたりするので、全く手がつけられなかつた。それにあふられて皆は一層醉ひを增したのであつた。女給達もさすがに持て餘して、もう逃げて歩いてゐた。春江は頭からビールを浴びせられて、着物も何もづく〳〵にしてしまつた。

それでも店の主人はさうした客を扱ひ馴れてゐるので、うまく機嫌をとつて、筒井だけ自動車にのせて歸すことにした。筒井はもう前後の見境ひもなくなつて、春江の腕へしがみついたなり、どうしても放さうとはしなかつた。

春江は泣きさうな顏をしておろ〳〵してゐたが、主人はとにかく途中が心配だから、筒井の自動車へ一緒に乘つて、彼を家まで送り屆けて上げろといふので、春江もほと〳〵困つてしまつた。といつて、店の迷惑を考へるとこのまゝにしておく譯にもいかないので、彼女はやがて支度をして、

しぶ〳〵その自動車へ乘つた。彼女にはその時、妙に不吉な豫覺が感じられて、何がなしに空恐ろしくて耐らないのであつた。

十二

筒井は、その時分、牛込の若松町に住んでゐた。丁度電車通りから早稻田の方へ下りる坂の中途のところにある二階建ての洋館で、とてもすばらしい邸であつた。彼一人なら何もそんな立派な家に住む必要はなかつたのだが、彼の父親は貴族院の多額納稅議員なので、東京へ出てくる度に宿屋をとるのも面倒なところから、別邸のやうなつもりでそんな家を借りて、筒井にあてがつてある譯なのであつた。筒井はそこで早稻田の工手學校へ通つてゐる書生と、炊事をする婆やとたつた三人で、至極呑氣に暮らしてゐるのであつた。

春江は筒井がどうしても家へ上れといつて承知しないので、おづおづ應接室まで上つた。彼女は出來ることなら門のところまで筒井を送つて、歸りの自動車で又すぐに神田へ歸つてくるつもりでゐたのだが、折角こゝまで來て上へあがらない法はないといつて、筒井が大きな聲で怒鳴るので、

仕方がなしに彼の云ふ通りにしたのであつた。彼女は上りは上つたものゝ、家の中があんまり立派で堂々としてゐるので、もうすつかり度膽をぬかれて、きよろ〳〵してゐた。

筒井は家へ歸つてもまだ駄々をこねて、やれ、ウヰスキーをもつてこいの、果物をむいて來いのと我儘を云つては、書生や婆やを手古摺らしてゐた。春江は氣の毒で耐らないので、どうかして隙をみて逃げ歸らうと思つて、立つたり、坐つたりしながらちつとも落着かなかつた。

筒井はしばらくすると、今度は春江を無理に自分の書齋へ連れていつた。うつかりしてみてゐると、彼は少しも知らない間に、入口の扉へ中から鍵をかけてしまつた。さうしておいて、彼は春江を自分と一緒の安樂椅子へ坐らせ、無理無體に彼女にウヰスキーを飲ませた。一杯飲みさへすればすぐに歸してやるといふので、彼女もそれに釣られて、到頭三四杯たてつづけに飲まされてしまつた。

マンテルピースのうへの飾時計は、もう午前の一時半を示してゐた。筒井はその時分にはすつかり野獸のやうになつてゐて、みてゐられないやうな醜態を演じながら、春江に迫つて來た。搔き口説くといふよりも、狂暴な力で彼女を征服しようとした。春江は恐ろしさにぶる〳〵慄へながら頻

りに抵抗したが、スポーツマンであるところの血氣な筒井には無論敵すべくもなかつた。春江は×××××××××××、×××××、激しく泣いて、

『結婚して下さい、結婚して下さい……』と、叫びながら、到頭安樂椅子のうへゝ倒れてしまつた。

春江は×××××歸してくれと、泣いて賴んだが、筒井はどうしても許さなかつた。で、彼女もう萬策つきて、そのまゝ彼の書齋で夜を明かすより他はなかつた。

筒井は春江の傍をはなれると、又ウヰスキイを自分で注いで飲みだしたが、その時にはひどく感傷的になつてゐて、自分の所業を人道主義的に悔いてゐるやうであつた。醉つてはゐながらも、彼は眞心から春江を愛してゐるので、云ふことには眞實がひびいてゐた。筒井はその時、彼女と結婚することを堅くかたく誓つてくれたのであつた。

春江ももうかうなつては、後へは退けなかつた。彼女もその誓ひを聞いて、いくらか心持ちも靜かになつて來た。

その翌朝になつて、筒井が死んだやうにぐつすり寢こんでゐる隙を見計らつて、春江はやつと神田の家へ逃げ歸つた。頭髪も何もそゝけて、彼女はまるで病人のやうな顏をしてゐた。さんざ飲ま

されたウキスキイがまだ殘つてゐて、じツとしてゐても、涙ばかりが突き上げてくるやうな、耐らない氣持ちであつた。

家へ歸つてみると、榮次郎は階下の臺所で飯を炊いてゐた。彼は姉の顏をみると、默つて二階へ上つていつた。彼も妙に蒼ざめた泣きさうな顏をしてゐて、机の前へ坐つたつきり口もきかなかつた。

春江は彼にじツとみられるだけでも恥かしい氣がするので、それなり手拭や石鹸をもつて朝風呂へ出かけてしまつた。風呂から歸つてもまだ氣分がなほらないので、化粧も何もしずに彼女は押入れの側へいつてごろりと臥てしまつた。彼女はレウマチのやうに腰から下が痛み出して、寢返りを打つのも辛かつた。それまで默つてゐた榮次郎も見兼ねて、

『姉さん、寢ろんなら、臥床をとつてお寢なさい。』といふ。さういふ聲までが春江にはぴん〳〵頭へひびいた。彼女は肱をたて〻枕にしながら、

『いゝえ、いゝのよ。少し横になつてゐたら、きつと氣分がなほるだらうから。』と云つて、云ひ譯でもするやうに、『何にしろ、昨夜はまる〳〵夜通しをしちやつたもんだから、もう私頭が痛んで……』

榮次郎は耐らなさうに歎息をついて、

『姉さん。到頭姉さんにも暗黑時代が初まりましたねえ。僕もう此間からはら〳〵してゐたんだけど、僕の口からまさかそんなことも云へないと思つて、默つてゐたんです。姉さん、姉さんは自分であんなに誓つたことを忘れてしまつたんですか。』

春江は紙襖の面に反射してゐる佗びしい日の色を眺めながら、默つてゐた。もう涙は自棄に喉のところまで込み上げてゐて、もう一言云はれたら、わツと聲をたて〻泣き出しさうになつてゐた。

榮次郎は一生懸命になつてゐるやうな聲で、

『ねえ、姉さん、いつもいふ通り、僕姉さん一人が賴りなんです。今姉さんにもしものことでもあつたら、僕は、僕は、どうすりやいゝんです。たつた姉弟二人つきりで、こんな辛い生活を支持してゐるのに、姉さんが、姉さんが、お酒を飲んだり、家を明けたりするやうになつたら、もうそれで何も彼もおしまひです。姉さん、どうして姉さんは誘惑に負けてしまつたんです。あんなに誓つておきながら、それぢやあんまり情ないぢやありませんか。……』

春江はそこまで云はれると、もう我にもなくかッとなつて、
『榮ちやん。生意氣いふもんぢやないわ。ひと晩位家を明けたつて、何にが誘惑に負けたんです。人の氣も知らないで、……姉さんは、姉さんは、どうかしてあんたを立派な人間にしようと思ふからこそ、こんな、こんな辛い思ひもしてゐるんぢやありませんか。それだのに、それだのに、默つてゐりやいゝ氣になつて、……』そこまで云ひかけるともう舌が引釣つて、彼女は口がきけなくなつてしまつた。いくら我慢をしようと思つても、嗚咽は壓倒的に喉を押し塞いで來て、春江は齒をくひしばりながらさも息苦しさうにおい〳〵泣き出してしまつた。
榮次郎も泣きだして、
『いゝえ、姉さん。そりや僕にも分つてゐます。姉さんがさういふ氣持ちで僕のためにつくしてゐて下さることも、僕よく知つてゐるんです。僕は口では云へないけど、そりや心の中ぢや感謝してゐるんです。昨夜だつて僕、かうやつて机の前へ坐つたきりひと晩中起きてゐたんです。姉さんの體に何か凶いことがないやうにつて、僕、ひと晩中神樣に祈つてゐたんです。』と、云つて、彼はせぐりくる嗚咽が靜まるのを待つて、『ねえ、姉さん。ですけど、僕、姉さんにそんなことまでさせて

自分が出世をしようなんて、そんなことは僕、思つてゐません。姉さんを正しくない道へ落として弟がどうして默つてみてゐられませう。それぢや僕、僕のために、姉さんを賣ることになります。そんなことをしたら、僕、亡つたお父樣や、お母樣にすみません。……』
春江はもう半狂亂になつて、身を悶えながら、
『榮ちやん。もうお默り。默つて頂戴。あんたはまだ子供だから、世間のことは一つも分らないんだ。今の世の中では、お金をとる爲めには命を捨てる人だつてあるんだわ。それだのに、それだのに……。』
『そりや、姉さん。僕だつてもうこれだけ苦しんで來たんですから、それッ位なことは分りますよ。ですから、僕もし、僕のために姉さんが體を賣らなけりやならないやうな時が來たら、もうその時こそ僕も覺悟をきめようと思つて、平常から僕だつて決心してゐたんです。姉さんだつて、僕だつて、今が一番大事な時なんだから、今こゝで間違つたらもう一生取返しがつかないんです。ですから、僕、もし姉さんがそんなことまでするんなら、僕は自分で獨立してやります。さうして僕、姉さんの負擔を少しでも輕くして上げて、それで姉さんにも清く生きて貰ひます。僕にだつて、その

決心はきまつてゐるんですから。』

春江は泣きながら、

『榮ちやん。あんたも此頃はほんとに生意氣な口をきくやうになつたわね。まだ一人歩きも出來ない癖に、そんな大きな口をきくもんぢやないわ。こんなに姉さんが苦しんでゐるのが分つたら、もつと素直にしてゐるがいゝぢやないの。だから私、もう先から云つてるぢやありませんか。どうせもう私の一生はすたつたんだから私はあんたの犠牲になるつて、あんなに始終云つてるんぢやないの。』

『犠牲つて、姉さん。僕、ほんたうのことをいふと、そんな意味で姉さんに犠牲になつて貰ひ度くはないんです。僕の考へてゐることは……』

『もういゝわ。もうそんなこと聞かない。あんた、そんなことを云ふんなら、勝手にしたらいゝぢやないの。獨立するなり、自分一人でやつていくなり、どうでも好きなやうにするがいゝわ。ほんとに人の氣も知らないで、よくも、そんな、そんなことが平氣で云へるもんだ。』さういひひ、春江はおい〳〵泣いてゐた。

榮次郎も下唇を嚙みながら口惜しさうにせぐり泣いてゐたが、やがて、

『姉さん。僕達は今日といふ今日まで、唯の一度だつてこんな厭なことを云ひ合つたことはなかつたんです。姉さん、それを考へて下すつたら、僕、僕……』

『私、もう知らないわよッ。もうあんたの云ふことなんか聞かないわ。つッ、義理知らず！　あんたのやうな自分勝手な人は、一人でどうともするがいゝわ。こんなに、こんなに私が苦しんでるのに……』

さういつて春江は、ふら〳〵起き上つたかと思ふと、今度は押入れから自棄に小夜着を引摺り出して、そのまゝそれを引被つて又ごろりと寢てしまつた。

榮次郎はその不貞ッ腐れた樣子を涙の眼でじいッと見ながら、しくりしくり泣いてゐた。彼の顏は鉛のやうに蒼ざめて、その眼にはもう何かしら行詰めたやうな決心が輝いてゐた。

榮次郎はやがて起ち上つて、足音を忍ぶやうに階下へ下りていつた。それつきり長いこと上つて來なかつたが、しばらくするとまだ湯氣の立つてゐるお釜を盆にのせて、それと漬物の丼をもつて又上つて來た。彼は室の隅へ膳ごしらへをして、こそこそ朝飯の支度をした。

『姉さん。御飯が出來ましたよ。』と、彼は涙聲でいつたが、春江は返事もしなかつた。引被つた小夜着が、かすかに時をつくつて波打つてゐるのをみると、彼女は夜着の中で泣いてゐるらしかつた。

榮次郎は取附く島もなくなつて、たつた一人で飯をやり出した。彼の後影はしよんぼり張壁の面へうつツて、箸を上げ下しする度に、その影は濃くなつたり、薄くなつたりした。

榮次郎は茶のかはりに素湯をのむと、棚からアルミニュームの辨當箱を出してきて、それへ飯をつめた。彼はそれをもつてもう何んにも云はずに、やがてすごすご學校へ出ていつてしまつた。

彼の足音が戸外へ消えていつてしまふと春江はがばとはねおきて、肱懸窓から下の往來の方を覗いてみた。薄日の射した通りには、榮次郎と同じやうな恰好をした學生がしつきりなしに通つてゐた。春江はその中に、力ぬけがしたやうな後姿をみせながら歩いていく榮次郎を見つけ出すと、もう胸が一杯になつて、又激しい嗚咽に息をつまらせてしまつた。

十三

春江はそれからぐつすりひと睡入りしたので、午過ぎになると、それでもいくらか氣分もさつぱ

りして來た。たつた一人でしよんぼりしてゐると、いろんな悲しいことが先から先と考へられて、自分でも何うにも足搔きがつかなくなつて來るので、彼女はやがて冷たくなつた飯に茶をぶツかけて食べたあとで、不精々々に支度をしてウイステリアへ出ていつた。店で客扱ひをしてゐた方が却つて氣分が直るだらうと思つて、彼女は自棄な心持ちで出懸けていつたのであつた。

店へ來てみると、昨夜の騷ぎがえらかつたゞけに、主人までが心配さうな顏で出て來て、何うしたといつて、しきりにあれからのことを訊いた。春江は無論他人に話すべき性質のことでもないので、態と鼻の先であしらつて、

『私、どうもしませんわ。お宅まで送つていつて、すぐその足で家へ歸つてしまつたんですの。』

主人はそれでも何か氣がかりさうに、

『しかし筒井さんもあの勢ぢやなか〳〵君を離さなかつたらう。よくそれでもうまく遁げて歸れたねえ。君もなか〳〵達者だねえ。はゝゝゝゝゝ。』

『そりやもうそこは、私だつて心得たもんですわ。皆さんのお仕込みで、此頃は私も相當に惡くなりましたからね。ほゝゝゝゝ。』春江は蓮葉に云つて、にや〳〵笑つてゐた。

筒井はその晩も一人でやつて來た。もうとても一日だつて春江に逢はずにはゐられないといつたやうな心持ちを彼ははつきりその眼に現はしてゐた。彼も口だけは惡摺れがしてゐたが、その晩の樣子でみると、やつぱり金持ちのお坊ちやんといふ型を脫してはゐなかつた。

筒井は夜おそくまでひとつ卓へ坐つて、しきりに飲んでゐた。昨夜の今夜とて、彼もひどく氣兼ねをして、他の女給達にも一生懸命になつて愛嬌を振りまいてゐた。春江も仕方がなしにその卓へ椅子をもつていつて、筒井と並んで坐つてゐたが、昨夜のことを思ひ出すと、體中が熱くなつていくやうであつた。ふとした拍子に眼と眼が合ふと、筒井は眩ぶしさうに伏眼になつてしまつたがその樣子が春江には却つて憎らしくて耐らなかつた。この男が昨夜はあんな恐ろしい暴力をふるつて、とう〳〵自分から處女を奪つてしまつたのかと思ふと、彼女はしまひには彼の横面を力一杯にぴしりと毆りのめしてやり度いやうな激しい憎惡さへ感じてくるのであつた。鬚を剃つて、いつもよりずつと綺麗な顏をしてゐるのに、春江にはその顏が却つて野獸のやうにみえてならなかつた。

春江がたつた一人になると、筒井はやつと思ひ切つたやうに、

『ねえ、君、昨夜はほんとに失敬したよ。僕君がさぞ怒つてゐるだらうと思つて、實は、今夜はび

く〳〵もんで謝りに來たんだよ。どうか許してくれないか。』と、氣拙さうに、肩をちぢめる。

春江はさツと顏を紅くして、あらぬ方へ眼を外らしてしまつた。

筒井は卓の下でそつと彼女の手を握つて、

『ねえ、春江さん。ほんとに許してくれよねえ。許してくれるだらう。昨夜は僕、ほんたうのところ、前後不覺に醉つてゐてね。それこそ何にも分らなかつたんだもの。いつもならあんなことするんぢやないんだが、實際僕後悔してゐるんだよ。』と、心から面目なさゝうにいふ。

春江は今度は大膽にきツと筒井の顏を見据ゑて、しばらくの間、口をもぐ〳〵やつてゐたが、やがて冷たい聲で、

『筒井さん。昨夜のことは、醉つたうへの笑談ぢや濟みませんわよ。あんた、私に何んていつたか覺えてゐらしつて？』

筒井は力をつけるやうにウヰスキイをぐうツと呷つて、

『そりや僕だつてよく覺えてゐるさ。そんな君、無責任な僕ぢやないよ。あの時には僕、無茶苦茶だつたけど、今日になつて僕、すつかり自分のしたことを反省してみたのさ。さうしたら、もう僕

耐らなくなつちやつてね。是非君に逢つて、君の胸のすむやうに心から詫びが云ひ度いと思つてねえ。』

『ぢや筒井さん。あんた、私に詫びを云へば、それですむと思つて被居るんですの。』

筒井は慌てゝそれを押へて、

『いや、いや、君、さうぢやないよ。さうとつてくれちや僕困るんだ。……』と、彼はへどもどして、『實はね、君、それで僕、今夜はね。そのことに就いて、君とゆつくり話し度いと思つてね。ゆつくり相談しあつたら、君もよく了解してくれると思ふんだが、どうだい、君、店を仕舞つたらもう一度何んとかして僕の家へやつて來てくれないかねえ。さうすりや萬事は分ると思ふんだ。』と彼は、春江の心を讀むやうにおづ〳〵いふ。

春江はふんといふやうな顏をして、

『もう私、お宅へなんかいくの懲りごりですわ。下手な探偵小說みたいに、扉をぴちんとロックアツプなんかされて耐るもんぢやありませんわ。ほんとにあんたも卑怯な方ねえ。』

『いや、もうどうかそれは云はないでくれ給へよ。こんなに謝つてゐるんぢやないか。』と、筒井は

ひどく照れて、『若し君が、僕の家へ來るのが厭だつていふんなら、僕、もう何處だつていゝんだよ。とにかく君と二人つきりで隔意のない話がし度いんだからね。』

いろ〳〵揉み合つた揚句、春江はとにかくそれでは、店を仕舞つたら、一緒の自動車に乘つて、一時間ばかり何處かへドライブにいかうといふことで折れ合つた。彼女はもう筒井の性根を見据ゑてゐるので、もう二度と再び昨夜のやうな眞似はしまいとそれは信じてゐた。彼女とてもこれつぱなしでは、何うにも身の立てやうがないので、筒井に對して何かしてやらなければ、腹の虫が納まらなかつた。

十二時に店が閉まると、春江は、筒井に駿河臺下のところで待つてゐてもらつて、大急ぎで歸り支度をした。その晩は大變に忙がしかつたので、傳票の始末だけでも可成り面倒だつた。それでもやつとそれを濟まして、彼女は一寸顏だけなほして、すぐさま店を出てしまつた。

駿河臺下へ來てみると、薄暗い街燈の光の陰に、筒井が立派なハイアの自動車を一臺やとつて、此方をきよろ〳〵見廻はしながら待つてゐた。筒井は彼女がすつぽかしでもすると思つてゐたとみえ、彼女が姿をみせると、もうさも嬉しさうに、いそ〳〵しだした。二人は、そのまゝその自動車

に乘つて、先づ九段から濠端の方へ向つて駛らせた。

筒井は車の中で、改めて結婚のことを云ひ出した。春江の方が今度は先を越されたので、却つて受身になつてしまつた。筒井も今夜はさう醉つてもゐないので、云ふことも辻褄が合つてゐた。彼は眞面目になつて先から先と結婚の相談をもちかけた。その樣子でみると、彼はさうなることを非常に喜んでゐて、もし春江さへ眞實その氣なら、こんなうれしいことはないと云つて、言葉の端々にも僞りのない眞情が溢れてゐた。

春江ももう今となつては、結婚して貰ふより他はないと、一途にさう思ひつめてゐた。先刻顏をみた時には、腹立ち紛れに、いろんな反感ももつてみたが、男にさうまでに云はれてみると、彼女はとてもがらりと心持ちが變らずにはゐなかつた。幸ひ筒井は資產家の息子だといふし、生活向きをみただけでも、とにかく一生賴りになる男には相違なかつた。それを思ふと、春江は何がなしに直ぐに決心が極つてしまつたのであつた。

『ねえ、筒井さん、でもあなた、そんなうまいことを云つて、口ばかしぢやないの。あんたはほんとに當てにならないからねえ。』

筒井はその手を破れるほどしつかり握つて、

『いや、春江さん。そんな馬鹿なことがあつて耐るもんか。僕は君、もう一生懸命なんだぜ。もうかうなつたうへは、僕だつて何處までも責任をもたなけりや、男として顏が立たんぢやないか。』

『さう責任、責任て、あんた、責任ばかしぢや私、厭ですわ。御自分が過ちをしたから、その尻拭ひをする氣で結婚して下さるんぢや私、つまんないわ。あんたほんとに、私つてものを何う思つて下さるの。』

筒井は熱狂して、

『そりや君、無論僕は死ぬほど君を愛してゐるさ。それだから僕はあらゆる困難を排して今君に求婚をしてゐるんぢやないか。君だつて、もう昨今のつきあひぢやないんだから、それ位なことは分つてゐてくれると思ふがなあ。』

春江は默つて、傍を向いて笑つてゐた。

自動車が日比谷まで來ると、筒井は今度は虎の門から赤坂の溜池の方へ駛らせた。その間も彼は運轉手のみる眼があるのでもう興奮の遣り場がなくて、可笑しい程もだ〳〵してゐた。思ふやうに

春江の體が扱へないので、彼は唯彼女の手ばかり揉みくちやにしてゐた。春江も何んだかもどかしくて、顏ばかりが熱てつて耐らなかつた。そのうちに自動車はいつの間にか四谷見附へ來てしまつたので、筒井は春江の耳へ口を押附けて、

『ねえ、春江さん。僕、これだけで別れるのは厭だから、いつそこれから家へ來給へよ。まだ、もつと〳〵話し度いこともあるしね、それに、……』と、いつて、彼はごくりと生唾を呑んだ。

春江も今更斷れなくなつて、筒井のいふなりに、それから若松町の彼の家へいつた。

筒井は又昨夜のやうに、彼女を自分の書齋へ連れていつて、そこでウヰスキイを飲みながら、もつと〳〵具體的に話をすゝめた。春江は筒井が結婚をするに就いての、條件をしきりに訊くので、彼女ももう思ひ切つて何も彼も打明けて話してしまつた　彼女は自分の氏素性もすつかり明かして今の自分としては何よりも弟の榮次郎の將來をみてくれることが唯一の條件だと答へた。それより他に事實、何もないのであつた。

筒井はそんなことなら譯はないといつて、その場で引受けてくれた。彼も春江の生家が意外にも立派な材木問屋だと聞いて、ひど〳〵滿足してゐるやうであつた。彼には來年大學を卒業すると同時

に父から分けて貰へる十萬圓ばかりの資產があるので、少しも前途の心配は要らないのであつた。唯こゝで呑み込んでゐて貰はなければならないのは、正式に結婚式を擧げる時機であつた。父親は腹の大きな、些事には少しもこだはらない男なので、別に面倒はなかつたが、筒井には出戻りの煩い姉が一人あるので、それを說き伏せるのに、相當時間と手間がいるだらうといつた。それもこの正月の休暇に歸省して、何んとかうまく胡摩化すから、とにかく來年の卒業期まで、默つて現狀のまゝでゐてくれといつた。

さう譯が分つてみると、春江の方にも別に云ひ分はなかつた。彼女は餘りにも忽如として思ひもかけない幸福な境遇が惠まれて來たので、彼女は夢でもみてゐるやうにぼうッとしてしまつた。鄕里の方にある筒井の本家の宏壯な屋敷の寫眞なぞをみせられるにつけても、彼女は唯胸がどき〳〵してくるのであつた。こんなことなら初めつからこの筒井を愛すればよかつたと思つて、彼女は今迄つれなくしてゐたのが却つて勿體なくなつてしまつた。

『ねえ、春江さん。これで萬事話はきまつたが、今度は君の番だよ。君ももうかうなつたら、是非ほんとうのことを告白してくれないか。こんなことを訊いて何んだが、君、今迄に誰れか男を愛し

たことがあるのかい。』と、筒井は春江の肩を抱きながら、うつとり眼を据ゑてきいた。

春江は媚びのある上眼で恥かしさうに筒井をみて、

『あら、そんなことありませんわ。私、ほんとにまだ處女なんですのよ。あんた、お分りにならなくつて。』と、いつて、彼女は自分から筒井の胸へ顏を埋めてしまつた。

十四

その翌日、春江は自動車で送られて、わが家へ歸つていつた。朝のうちに歸らなければと思つてゐながら、彼女もついに男に別れるのが寂しくなつて、到頭午後の五時まで筒井の家で遊んでしまつた。

家へ歸つてみると、その日は日曜なのに何うしたことか、弟の榮次郎は影も形もみえなかつた。吃驚して階下の內儀さんに聞いてみると、彼は少し都合があつて、當分の間、姉と別れて暮らすからといつて、自分だけの荷物を引纏めて、今日の午過ぎに飄然と何處かへ行つてしまつたといふ。それを聞くと、春江は息がつまるほど驚いてしまつた。いかに何んでもあまりに思ひ切つた仕打

ちである。きつと自分が二日もつゞけて家を明けたので、もう弟はすつかり絕望して、そんな無茶な眞似をしたのであらう。昨日の朝、あんな忌な云爭ひをしてそのまゝ別れてしまつただけに、春江は全く何うにも出來なくなつてしまつたのであつた。まさか、あの弟のことであるから、短氣な眞似をしたのではあるまいと思つても、春江は何んだか安心が出來なくて、胸がぎうツと塞つてくるのであつた。

それにしても、自分がこんなにまでして、彼の將來を約束して來たのに、一言の斷りもなく自分を捨てゝ出ていつてしまふとは、何んといふ身勝手な弟だらう。可哀想には可哀想でも、春江は一方から考へると、もう腹が立つて、腹が立つて耐らないのであつた。春江はもう自棄になつて、『ふん、どうとも勝手にするがいゝわ。もう私、構つてやらないから。』と、投げ出すやうにさういつて、彼女はとんとんと足早に二階へ上つていつてしまつた。

二階の部屋はさう思つてみるとがらんとして、人氣もなかつた。春江は自分で臥床をしいてそれから夜までうつらうつらと不貞寢をしてしまつた。夜になつてから彼女は風呂へいつて、それから身仕度をしてやつとウイステリアへ出ていつた。その晩も彼女は客の相手をして、いつになくひど

く醉ふほど酒を飲んだのであつた。

その翌日の朝、弟の榮次郎からは手紙が來た。それによると、彼は學校の先生の紹介で本郷の或る製藥化學の研究所へ入れて貰つたから、どうか自分のことは少しも心配しないでくれ。その代り姉さんももう一度考へ直して、どうか正しい人間として生きていつて下さい。自分のゐる處番地は態と知らせないから、便りのない間は、無事に勉强してゐるものと思つて頂き度い。いづれ自分も何かこれといふ仕事をしあげたら、改めて姉さんに逢つて、お詫びをいふからと、涙の滲むやうな眞實をこめた調子で書いてゐた。

春江はそれを讀むと、さすがに泣かずにはゐられなかつた。あんな氣の小さい、几帳面な弟のことだから、これまでに決心をきめるには、隨分苦しみもしたであらう。悲しみもしたであらう。それを思ひやると、何んだか彼が無上に可哀想で耐らなかつた。

併し春江とても、今度こそは立派に身を堅めるのであるから、少しも弟に恥ぢる處はなかつた。弟もさうやつて學校の先生がついてゐてくれるなら、別に大して心配することもなからうから、自分は自分で明るい運命を拓いていかう。學校の先生といふのは柴山といふ極めて親切な人物で、

もう平常から榮次郎をわが子のやうに可愛がつてゐてくれるといふ話なので、その先生にさへ預けておけば、少しも氣懸りはないのであつた。たとへ處番地はお互に知らなくても、同じ東京うちにゐるのであるから、逢はうと思へばいつでも逢へるのである。さう思つて春江は無理に心を安めたのであつた。

春江はそれから十日ばかりたつて、愈々筒井の家へ同棲することになつた。無論ウイステリアの方は止めて、多勢の服輩達には嫉妬と羨望の眼に送られながら、自分も輝かしい新生涯へ入る歡びに醉ひしれつゝ彼女は筒井の家の人となつたのであつた。

筒井の家は心配してゐたとはころツと變つて、至極呑氣な、自由な家であつた。カツフエの女給なぞをしてゐた女と聞くと、大概な家では頭から見くびられてしまふのに、そこでは書生も婆やもそんな氣振りはなく、皆親切にしてくれた。それに春江が相當な家の娘だと分ると、一層彼等は距てなくもてなしてくれた。

春江はそれからは毎日々々夢のやうな氣持ちで、樂しく日を送つてゐた。まだ結婚式はあげなくても、もう新妻のやうな、晴れやかな自分を感じて、家庭生活に對する興味も、希望も一時に燃え

上つてくるのであつた。彼女はよき家婦としての自分を教養するために一生懸命になつて努力をした。

二月三月は瞬く間に過ぎ去つてしまつた。

十五

併しさうした不自然な結婚に立脚した幸福は決して長く續くものではなかつた。身分から云つても、境遇からいつても、その結婚にはもとより最初から大きな無理があつたのであつた。飽きつぽい、スポーツマン肌の筒井には、間もなく一本氣な春江が、鼻について來た。それに何處へいつても、女にちやほやされる若い筒井が、さういつまでも一人の女に興味をもつてゐられる筈はなかつた。春江はだん〳〵彼に飽きられる日がやつて來た。

筒井と春江の間には、毎日のやうに云爭ひが絶えなかつた。一寸したことにも筒井は腹を立てて、何うかすると什器を投げつけたりした。さうした鬪爭は日に日に深刻になつていくばかりであつた。

或晩のこと、筒井はおそく醉つて歸つて來て、洋服のぬがせやうが惡いといつて、いきなり春江を毆り飛ばした。春江もむかツ腹を立てゝ反抗したので、筒井はありあふストーヴの灰かきで散々に彼女を打ちのめした。そのために彼女は全身に數箇所の打撲傷を受けた。

春江もさすがに我慢が出來なくなつて、そのまゝ半狂亂になつて筒井の家を飛び出してしまつた。もういつそこの足で鐵道線路へでも飛び込んで、筒井に面當てをしてやらうなぞと思ひながら彼女は深夜の町をさまよひ歩いたが、さて心が落着いてみると、今更死ぬだけの勇氣もなかつた。といつて、何處にも身の置きどころがないので、彼女は仕方がなしに恥ぢを忍んで又もとの洋服店の二階へ歸つていつた。幸ひそこはその後空いたまゝになつてゐたので、彼女は當分の間そこへ置いて貰ふことにした。

筒井家での一件を話すと、洋服店の主人も、それはあんまり亂暴な仕方だといつて、頻りに春江の尻押しをした。このまゝ緣を切られてしまつてはいかにも業腹だから、いつそ辯護士へ賴んで、何んとか始末をつけてもらへとよくない智慧をつけてくれた。で、春江も腹立ちまぎれに、洋服屋の出入先の怪しげな辯護士をつかつて、筒井家へ乘込ませ、すつた揉んだの末にまんまと二千圓と

いふ手切金をとつたのであつた。その二千圓も半分は辯護士と洋服屋に取られて、あとの千圓だけがやつと自分の手へ入つたのであつた。

生れて初めて千圓といふ大金が懷へ入ると、さすがに春江も氣が咎めてならなかつた。まだ善良な氣持ちの失せない春江は何んだか惡いことをして取つた金のやうな氣がして、おちおちしてゐられなかつた。

かうなつてみると、思ひ出されるのは弟の榮次郎のことであつた。こんな大きな失敗をしたあとで、やさしく慰めてくれるのは、弟をおいて他にはなかつた。彼女はその日はもう朝から榮次郎に逢ひ度くて、逢ひ度くて耐らなかつた。

夕方になると、やつと腹もきまつたので、春江は夕飯をすますとすぐに支度をして、久振りで町へ出て行つた。彼女はもう思ひ切つて、柴山先生の家を訪ねてみる氣でゐた。

柴山先生の家は小石川の久堅町にあつた。製藥の方面では隨分顏の賣れた學者ではあつたが、さうした人達の生活は實につましいもので、先生は靜かな横丁の崖下にある六間ばかりの見すぼらしい平家に住んでゐた。生垣の間からちろ〳〵電燈の光が洩れて、家の中からは子供のさわぐ聲が手

に取るやうに聞えて來た。

柴山先生は早速逢つてくれた。五十五六の頭の禿げた氣の好ささうな人柄で、始終にこ〳〵笑つてゐた。

春江が弟に逢はせてくれと賴むと、先生は少時考へたあとで、

『いや、それは可かん。それは私として、まだ許すことは出來ませんよ。』と、きつぱりいふ。

春江は涙ぐんで、

『でも先生、私、實は一身上のことについて是非弟に相談し度いことが御座いますんですの。どうかさう仰有らずに、五分でも十分でもよろしう御座いますから、弟に逢へるやうに取計つて頂く譯にはまゐりませんでせうか。』

『いや、あんたの氣持ちはよく分つてをる。併しまあ、あんたも考へてみるがいゝ。今榮次郎君は試驗で夢中になつてをるところぢや。此間まではよくあんたのことをいうてをつたが、最近はやつと少し忘れて、一生懸命になつて勉强してをる最中なのぢやからねえ。こゝであんたが逢ひにいつたりしたら、榮次郎君は又心が亂れて、折角の勉强が無駄になつてしまふからなあ。』

春江は先生が悪氣で云つてゐるのではないのが分ると、もうその先强つてとは云へなくなつてしまつた。で、彼女は泣く泣く帶の間から五百圓の金を出して、それを先生の前へ置きながら、

『先生、あの、それでは私、もう御無理は申上げません。先生のお心持ちはよく分りまして御座いますから、もうあきらめて歸ります。その代り先生。あの、このお金は私、一生懸命になつてためましたんで御座いますから、どうかこれを弟に、……せめてこのお金を學資として弟がつかつてくれましたら、私も思ひが屆くので御座いますから……』と、いつて咽び入つてしまふ。

先生は眼をしばたいてゐたが、やがて、

『金のことは私ではどうも取計ひ兼ねるから、とにかくまあお預りだけして置かう。いづれ今度の日曜には榮次郎君がこゝへ來るから、その時に相談して、何んとかしませう。これは大金ぢやからそれでは私から預り證を上げて置かうなあ。』と、いつて先生は机のうへから萬年筆をもつてきて、自分の名刺へ預り證を書いてくれた。さうした物堅い仕方が春江には、頼もしく思へてならなかつた。

だん〳〵樣子をきいてみると、榮次郎は今では研究所の中に寢起きしてゐて、彼方でも非常に將

來を囑望されてゐるといふことであつた。何よりも仕事がきちやうめんで、特に實驗の方面ではすばらしい天才をもつてゐるので、學校を卒業したら、すぐに研究所で引取つて、衣食の道には少しも困らないやうにしてやるといふことであつた。

それをきいて、春江もすつかり安心して、それから間もなく暇を告げた。先生は玄關まで送つて來て、

『それで、あんたはまだやつぱりカツフエで働いてをるのかな。』と、無雜作に訊く。

春江は態と語調を强めて、

『いゝえ、もう彼方の方はとうにやめまして、今はあの、ある會社で働いてをりますんで御座いますの。』と、思はず嘘をついてしまつた。

先生は禿げた頭をつるりと撫で上げて、さも機嫌がよさゝうに、

『ほう、それはえゝ。それは何よりぢや。榮次郎君にもその話をして嬉ばしてやらう。あの男は、その點ばかり心配してをつたんぢやからなあ。はゝゝゝゝ。』

春江は遁げるやうに先生の家の門を出てしまつた。

十六

春江は殘りの五百圓の金があるうちは、どうにも外へ出て働く氣がしなかつた。こんなことをしてゐてはいけないとは思ひながら、何んだか氣に張りが出て來なくて、つい毎日うか〳〵して日を暮らしてしまつた。

筒井とはもうあれつきりになつてしまつた。最初から愛を感じてあゝなつた譯ではないので、春江としてみれば少しも後に心殘りはなかつた。さうかといつて、彼女は別に又男が欲しいとも思はなかつた。

いよ〳〵金がなくなつてしまふと、春江はどうにも出來なくなつて、今度は須田町のミラノといふ店へ通ふことになつた。もう二度と再び女給なぞはやるまいと思つてはゐながら、いざとなつてみると、やつぱり馴れた仕事の方へ氣を引かれるのが人情であつた。春江はどうせもうこゝまで落ちて來た體だといふやうな自暴が先へ立つて、とう〳〵又もとの境涯へ入つていつてしまつたのであつた。

ミラノにも腰がすわらなくて、その次には人形町の孔雀といふ店へ巣をかへた。そこも半年ばかりでやめて、今度は銀座の裏町にあるアテネといふ店へ入つた。そのアテネで、彼女は思ひもかけない男に邂逅したのであつた。

或晩のこと、彼女はいつも來る大倉組の連中の卓へいつて油を賣つてゐると、その時、誰れかが後からやつて來てそつと彼女の肩を叩いた。吃驚して振顧つてみると、後には粋な緣つきのモーニングを着て、鼻眼鏡をかけた立派な青年紳士が、眞黑な帽子を眼深かにかぶつて、唇をにいツと綻ばせながら立つてゐる。春江は誰れだかさつぱり思ひ出せないので、じろじろ眼を据ゑながら、

『あら、誰方？』と、蓮葉に云ふと、その紳士は、親指で此方へ來いといふやうに合圖をして、そのまゝ大きな棕梠竹の鉢ものゝ陰にある卓へいつて腰を下ろしながら、帽子も取らずに、

『やあ、君、春江さん。しばらくだつたねえ。もう忘れたのかい。』と、微笑む。

よく見ると、それは思ひもかけない撮影所にゐたあの林であつた。彼はあの時分とは見違へるほど肥つて、髭をそつたあとも青々と美しく、一體に態度が上びて、すつかり品がよくなつてゐた。にいツと笑ふと昔の俤はあつたが、併し途中でひよつこり逢つたのでは無論分らないに相違なか

つた。それもその筈で、もう彼に別れてから三年の月日が經つてゐた。
春江も此頃では度胸も出來て來てゐるので、もう彼に逢つても慄へるやうなことはなかつた。彼女は愛想よく笑つて、
『まあ、あなたでしたの。隨分長いことお眼にかゝりませんわねえ。ようこそ。』と、いつて、さりげない顏で、『あの、何か召飲ります？』と、首を傾げて訊く。
林も鷹揚に、
『さあ、僕も此頃はもう酒をやめてね。まあ、熱い紅茶でも貰はうか。』と、いふ。
春江はすぐさまカウンターへいつて、熱い紅茶を出してもらつて、林の卓へもつて來た。
『ほんとにあなたもお變りになりましたわねえ。今何方に被居いますの。私もあすこを止めましてから、誰方にもお眼にかゝりませんので、ちつとも御樣子が分りませんのよ。』と、端へ聞えても可笑しくないやうに巧みに話をもちかける。
林はポケツトから白金製の薄手な煙草入れを出して、その中から金口をぬき出しながら、
『いや、僕は今大阪の方にゐるんですよ。實はね、僕もすつかり方面をかへてしまつてね。今彼地

で土地會社へ關係してゐるもんだから……。』
『まあ、それはよう御座いますのねえ。ぢやもうあの御商賣の方はお見限り？』
『さあ、まあね。あゝいふことは若いうちはいゝが、あんまり內容がなさすぎるんでね。だん〳〵年を老つて來ると、いつまで馬鹿もやつてゐられませんからね。はゝゝゝゝ。』『さういふ言葉つきもすつかり落着いて、昔とは人違ひがしてしまつてゐた。
春江はどうも腑に落ちないので、自然好奇心を感じながら、態と昔の話には觸れずに、
『それで、東京へはちよくちよくお出かけになりますんですの。』と、誘ひをかけてみた。
と、林はその顏をなつかしさうにしげ〳〵みて、
『え、この節は非常に忙がしいんで、まあ、月に三度か四度は往復しますよ。それにしても君もすつかり變りましたねえ。いや、實はね。僕、つい此間ホテルでね、「カツフエ」といふ雜誌をみたんですよ。ところがその中にあんたによく似た寫眞が出てゐたんでね。ひよつとしたら、あんたぢやないかと思つて、實は今夜、そこの神林組の事務所まで來たんで、ついでにこゝへ寄つてみたんですよ。ところがやつぱりあんたぢつたんで、僕もほんとに吃驚しましてねえ。』

『あら、まあ、あんな「カツフエ」なんていふ雜誌がお眼に止りましたの。困りますわねえ。ほゝゝゝ。私もね、この商賣に落ちた當座は何んだか恥かしくつて、隱れて歩いてばかしゐましたけど、もう此頃ぢや平氣になつてしまひましたの。ですから寫眞でも何んでももう臆面もなく何處へでも出してゐますんですわ。ひとつには宣傳にもなりますからねえ。ほゝゝゝゝ。』

林は何んだか氣の毒さうな顏をして、眼鏡越しに春江の顏ばかりみてゐた。

その晩は別に深い話もしずに、それから林は二十分ばかりゐて、歸つていつてしまつた。あと三四日は丸の内ホテルに滯在してゐるから、いづれ又通りがかりに寄るといつて、彼は名刺を一枚渡してあつさり別れていつてしまつた。その名刺をみると、會社は昭和土地起業株式會社といふので本店は大阪の高麗橋で、電話も六本からもつてゐた。それに自宅は住吉にあつて、そこにも電話があつた。その他に分讓地らしい吹田やあの附近の出張所なぞも細かく書いてあつた。春江はまるで狐にでもつまゝれたやうな氣持ちがしてゐた。

林はその翌晩も丁度同じ時刻にやつて來て、やつぱり二十分ばかりゐて歸つていつた。その翌晩もまたつゞけてやつて來た。

その翌日、春江は公休日であつたので、定連の人に誘はれて帝劇へいくことになつてゐた。で、少し早めに家を出て、馬場先門のところで電車を下りると、その時出逢ひ頭に一臺の箱型の自動車が日比谷の方から走つて來て、電車から下りた彼女の側をすれ〳〵に通つていつた。と、どうしたのか、その自動車は四五間いつてすうツと止つて、後窓から誰れかゞ眼だけ出して、此方へ手招ぎをする。とみると、それは意外にも林であつた。

春江も知らん顏をしてゐる譯にもいかないので、そつちへ歩み寄つていつて、輕い會釋をすると林は扉を開けて笑ひながら、何處へいくのだと訊く。

春江はもうあけすけに、

『私、今日はお客樣に誘はれましてね。これから帝劇へいくんですの。』と、答へたが、林は合點いて、

『そりやお樂しみですね。僕もね、實は今大阪の方から電報が來ましてね。今夜の七時の汽車で歸らうと思つてゐるんですよ。』と、云つて、又もうしばらくは逢へないから、若し都合が出來るのなら、十分か二十分つきあはないかといふ。そのすゝめ方もあつさりしてゐるし、別に他意もなさゝ

うなので、春江は何とはなしにいつてみる氣になつた。春江はそのまゝ彼の自動車へ一緒に乘つて丸の内ホテルへいつた。

林はホテルでもいゝ部屋をとつてゐた。彼はトランクのおいてある側の腕椅子を春江にすゝめて自分は立つたまゝ、

『ほんとに春江さん。實に今度ほ奇遇でしたねえ。僕も實はあの後是非一度どうかしてあんたに逢つて、詫びも云ひ度いし、又いろ〳〵話しもし度いと思つて、それこそ一生懸命になつてあんたの行方を探してをつたんですよ。やつぱりかうなつてみると、御縁はつきないんですねえ。』と、にこ〳〵しながらいつて、『あの時分はほんとに僕も考へが無責任で、隨分あなたを苦しめましたなあ。どうか許して下さい。』

『あらまあ、眞面目くさつて、何んですね。もう、そんな昔のことなんか云ひツこなしにしませうよ。ほゝゝゝゝ。』

『いや、さういはれると、猶更僕は穴へ入り度くなるが、併しお互に變りましたなあ。浮世は實に不思議なもんですよ。』と、云つて、彼はさも感慨に耐へないやうな思入れをする。

いろ〳〵話の緒を引出して訊いてみると、林は今昭和土地起業株式會社の企畫課長をやつてゐるのであつた。その會社は資本金五百萬圓で、もう創立してから、三年にもなる立派な會社らしかつた。林は初めその會社が、田園都市の經營をやつてゐた際に、娯樂場の映畫關係の仕事を助けてゐたのだが、それからうまく食ひ込んで、到頭自力で現在の地位に登つたのだといつてゐた。今ではもう妻子もあつて、まあどうやらかうやら彼地では顏もきくやうになつたから、どうかよろこんでくれと、いかにも打明けた調子でいつてゐた。

春江は少しえぐいとは思つたが、いつぞや例の井上正夫から聞いた話を思ひ出して、

『あの、それで、あなたは何うして蒲田の方はお止めになつたんですの。』と、何食はぬ顏で一矢酬いてみた。

と、林はさすがに恥かしさうに頭をかきながら、

『いや、どうもそれを訊かれると、僕も舊惡が露見してしまふんでねえ。一寸どうも工合が惡いんですが、まあいゝ。あなたゞから、何も彼も打明けて話してしまひませうねえ。はゝゝゝゝ』と、笑つて、

『あの、實はね。僕もあすこの撮影所にゐる間には、どうもよくない事ばかりやつたんでねえ。生フキルムをくつたり、會社の金をちよろまかしたり、それだけならまだいゝんだが、詐僞のやうなことも平氣でやりましたしねえ。もつと極端に云ふと、友達の金なんかも大分盜んだりしたんですよ。それが所長に知れたもんですから、到頭ばツさりやられましてねえ。それでも警察へ上げられてみると、さすがに僕だつて根からの惡人ぢやないんだから、すつかり善心に立歸りましてねえ。丁度一年ばかり多摩の刑務所で骨をぬかれたんで、それでもう僕もまるで人間が變つてしまつたんですよ。今から考へると、よくもまああんな恐ろしいことが出來たもんだと思つて、まるで夢のやうな氣がするんですよ。そのおかげで、僕もまあ、今日あるを得た譯なんだが、人間といふ奴は全くどん底まで落ちてみると、却つて生地が出るもんですなあ。』と、彼はしみ〴〵往時を悔いてゐるやうにいふのであつた。

春江は少しも包み隱しをしないその態度で、反對に彼に對して好感がもてるやうになつた。昔はあゝした關係になつてゐた女の自分に對して、刑務所へいつたことまで話すやうではもう彼の腹に少しも毒のない證據であつた。さう惡びれずにものが云へるやうになれば人間も大丈夫である。さう思つて、春江も訊かれるまゝに、自分の身のうへのことも隱さずに何から何迄物語つてしまつたのであつた。

林は兩腕を組んでじいツと聞き入つてゐたが、やがて涙ぐんだやうな眼つきをして、

『いや、どうもさういふ話を聞いてみると、あんたも隨分苦勞をしましたなあ。一體その、あんたが結婚した明大出の男つていふのは、何んていふ人なんです。名前はまだ打明けられませんか。』

『云つたつて構ひませんわ。それは、あの、筒井文三つていふんですの。』

林は意外さうな顏をして、

『ほう、筒井文三？　あの野球選手の？』と、云つて、『あれならあなた、家はすばらしい金滿家で、多額納稅者ぢやありませんか。』

『え、さうですわ。あなた、何うして御存知。』

『いや、僕はあの文三つていふ人は直接知りませんが、あの人のお父さんには、投資關係のことで二三度逢つたことがありますよ。太腹な迚も愉快な人ですよ。實に緣ていふものは不思議なもんですねえ。あんたはあの人と結婚をしたんですか。』と、しきりに感じ入つてゐる。

春江は照れて、

『あら、あなた。そんなに私の顏を御覽になつちや厭ですわ。それも今ぢや昔の夢なんですもの。』

『それはさうですけど、併しあんたも折角うまいものを捕へたのに、惜しいことをしましたなあ。あすこの家は山林だけでもあなた、五百萬からもつてゐるんですよ。大概なことならあんたも、辛抱すりやよかつたのにねえ。はゝゝゝゝ。』

『それがあなた、とても駄目なんですわ。亂暴で、薄情で、まるで氣狂みたいな人なんですもの。私もういくらお金があつたつて、とてもあんな家にやゐられませんわ。』

『ふむ、さうですかねえ。やつぱり我儘一杯で育てられた人なんでせうからねえ。』と、林は尤もらしく合點いて、『いや、併し、あんたが今そんな苦しい境遇に落ちてゐるのも、もとを云やあ、僕がしたんですよ。あのまゝ蒲田にゐりやもうあんたゞつて、一方のスターになれた人です。どうも何んとも申譯がないですなあ。それを思ふと、僕は全く慚愧に耐へんですよ。實に自分で自分が恨めしくなつてしまふんですよ。』と、彼もさすがに本心から悔悟してゐるやうに云つて、寂しく眼を伏せてしまつた。

林はそれからも諄々とした態度で、もうそんなカツフエの女給なぞはやめて、眞人間のする職業へかへれといつて、心から忠告をしてくれた。自分も今では過去の罪惡をどうにかして償ひ度いと思つてゐるさなかであるから、若し春江が今の境遇から救はれ度いと思ふならば、いつでも力をかさうといつた。自分のために不幸の底に沈淪してゐる人は、たゞの一人でも救ひ出さなければ神に對する義務が果せないとまで切言して、彼はしきりに春江に反省を強ひた。眞實は面に溢れ、いふ言葉にも何處か力が籠つてゐるので、春江も到頭泣かされてしまつた。

『ねえ、春江さん。こんなことをいつたら、あんたは笑ふかも知れないけど、僕も實は去年からキリスト教に入りましてねえ。今ぢやいくらか信仰も出來かゝつてゐるんで、それで僕は酒も遊びもすつかり止めてしまつた譯なんですよ。日曜にやこれでも子供を連れて教會へ通つてゐるんですよ。家内が神戸のものなんで、古くから信者だつたもんですからねえ。』

春江もそれと聞くと、涙を拭きながら、

『私、そんなお話を伺ふとほんとに、羨ましくなつちまひますわ。私だつて何もいつまでもこんな體でゐたくはないんですけど、やつぱり女は弱いもんですわねえ。ついやつぱり境遇に引摺られち

まつて、自分で自分が何うにもならなくなつてしまふんですわ。一度かういふところへ落ちてくると、もうとても浮び上れないもんですわねえ。』と、嗚咽を呑んで、『私、もうほんとに何よりも辛いのは、弟が相手にしてくれないことなんですわ。姉の私がこんなでは、弟だつて肩身が狭いのはよく分つてゐるんですけれど、もう此頃ぢや手紙一本くれないんですもの。それが私、何よりも悲しいんですわ。』

林はそれを慰めて、どうせ自分も又一週間ばかりのうちに、もう一度東京へ出てくるから、その時にゆつくり逢つて、何んとか方法を講じようと親切に云つてくれた。その時までに春江の方でも何かいゝ道を考へておくやうにとくれ〴〵も云つて、その日はそれなり別れてしまつた。彼は立つ前にもう二個所ばかり用を足さなければならない先があるからといつて、やがて春江を自動車で帝劇へ送り届けて、自分はその車で、もう暮れかゝつた濠端の雷車通りを何處へともなく駛り去つてしまつた。春江はその晩約束した若い會社員の客と、膝をならべて芝居をみてゐながら、心の中では林のことばかり考へてゐた。人間といふものは變れば變るものだと思ふと、彼女には林の昔の面影を想ひ出すことさへ、一寸困難であつた。とにもかくにも、春江はその時取り留めのない感じで

はあつたが、いつになく幸福に似た心持ちで、自分の身の行末を想望することが何よりも樂しかつた。

十七

春江が、林の世話で、突然大阪へいくやうになつたのは、それから間もなくのことであつた。林はその後一週間ばかりたつと、又東京へ出て來たが、その時に、彼はわざ〴〵春江を丸の内ホテルへ呼んで、そこでその話をきめたのであつた。林が春江にもつて來てくれたのは、大阪の或るデパートメント・ストアの高級女事務員の口であつた。

春江はあんまり棚から牡丹餅式のうまい話なので、初めは何んだか信じられなくて、

『でも、林さん。私、折角そんな口をもつて來て下すつても、私、ほんとに何んにも出來やしないんですから、果たして勤まるか何うか分りませんわ。私、それが不安でねえ。』

林は笑つて、

『いや、そりや大丈夫ですよ。僕だつて、仁をみて法を說くからね。はゝゝゝゝ。何にも女事務員

といつたつて、むづかしいことはないんですよ。初めは傳票の整理や、郵便物の整理位やつてゐりやいゝんだし、そのうちに朋輩が澤山ゐるから、仕事なんか自然に覺えますよ。最初からさう心配するにや當らんさ。はゝゝゝゝ。』

『でも、それで初給七十圓も頂いちや、勿體ないやうな氣がしますわね。算盤さへろくにはじけない私に、そんな高いお給金を拂ふなんて、隨分物好きな店もあるもんですわね。』

『いや、それだから僕がいつてゐるんぢやないか。つまり僕の息がかゝつてゐるから、そんな無理もきくんで、他からいつたんぢや無論駄目さ。あゝいふところは、何よりも背景ひとつだからね。』

と、云つて、林は葉卷の煙をふうツと空へ吐き出しながら、『それでまあ僕にすりや、あんたに對する責任もどうやら果たせるし、實に僕もほツとするからねえ。實際、僕大阪にゐても、あんたがカツフエなんかで働いてゐるのかと思ふと、全く腸を裂かれるやうな氣がするんですよ。實は僕、一昨日も教會へいつてねえ。牧師にすつかり告白をして、祭壇の前で懺悔をしてきたんですよ。』

春江は感動して、

『ほんとに私嬉れしうございますわ。あんたのお口からそんな事を聞くだけでも、私、どんなにいゝ

氣持ちだか知れませんわ。人間は全く潮時のもんねえ。どんな惡いことをした人だつて、悔悟をすりや却つて普通善人ていはれてる人よりか、いゝ人になれるんですものねえ。』

『全くですとも。それがいはゆる神の心なんですよ。まあ、僕位惡いことをして來た人間だつて、今日になつてみりや、却つてそのために、一層いゝ人間になれたのかも分らんですからなあ。潮時も必要だが、それと同時に、自己の修養つていふことも實際必要だと思ひますよ。』

林のいふことは一々春江の胸へぴんと響いていつた。そのものごしなり、言葉つきなりが、もうすつかりキリスト教の信者になりきつてゐるので、春江はいくら疑はうと思つても、彼を疑ふことが出來なかつた。

林はじツと春江の眼のところをみて、

『それで、春江さん、さう事が極つたら、あんた、いつから大阪へ來てくれますね。』と、いふ。

春江は一寸考へて、

『さあ、私、いつからだつていゝんですけれど——。』

『さうですか。そいぢや僕としては、なるべく早い方がいゝんだから、どうです、いつそ今度僕が

彼地へ歸る時に、一緒にいつてくれませんか。』
『それでも私、ようございますわ。あなた、いつまで東京に被居るの。』
『さあ、今度は一寸取引のことで、面倒な問題が起つてゐるんでね。一寸長びくだらうと思ふが、それにしたつて、二三日のことですよ。明後日は、はつきりした返事が出來るだらうと思ふんですが、あんた、それまでに支度は出來ますか。』
『え、そりや出來ますとも。私、今ゐる宿さへ疊みやいゝんですもの。荷物だつて、行李が二つと手廻りのものが少しばかりあるつきりなんですからね。そりや呑氣なもんよ。ほゝゝゝゝ。』
『はゝゝゝゝ。まるで渡鳥みたやうな生活ですねえ。そんなことをしてゐて、よく心細くないですねえ。』と、笑つて、林はしきりに考へてゐたが、やがて、『併し春江さん、僕はこんな忙がしい體ですからねえ。今は二三日滯在するつもりでゐても、ふいに又大阪の方で急用でも起りや、今夜にも彼地へ歸らなけりやならなくなるかも知れないんですよ。さういふ場合の用意にとにかく、支度だけは早くしておいてくれないですか。』
『え、ようございますわ。いざとなれば、二三時間もありやどうにだつてなるんですもの。』と、春江

は事もなげに云つて、
『あの、それから、私、彼地へいつてからですわねえ、私、何ういふ風にしてやつていつたらいいんでせう。當分體の方がきまる間は、どうしたつて宿屋にでも泊つてゐることになるんでせうねえ。』
『いや、そりやちつとも心配はいらんですよ。何んとか方法がたつまでは、無論僕の家にゐて貰ふつもりなんです。僕、もうさうするつもりで、家内にもよく話しておきましたからね。』
『あら、でも、私のやうなものが御厄介になつて、奥さんが變にお思ひになりやしません?、それだと私も工合が悪うございますわ。』
『いや、そんなことは斷じてないですよ。家内は、あんた、信者ですもの。僕があんたを救ふことには、家内も非常に贊成してゐましてねえ。もうそりや可笑しいほど躍起となつてゐるんですよ。僕の口から云ふと可笑しいけど、家内はそりや人格者ですよ。一遍會つて貰や分るけど、――』
『ほゝゝゝゝ。とんだ際どいところで、伺はせられますわねえ。でも笑談はぬきにして、私、ほんとに心から感謝いたしますわ。さうまでに親切にして頂くと、却つて私、氣がつまつて耐りません

わ。こんな私のやうなものを、御夫婦してそんなにまで思つて下さるのかと思ふと、私、ほんとに有難いと思ひますわ。』と、いつて、彼女は思はず涙ぐんでしまふのであつた。

林はゆつたりと笑つて、

『いや、春江さん。そりや僕の當然の義務ですもの。それをしなけりや僕は人間とは云へないですからね。まあ、何はともあれ、早速大阪の方へさういつてやりませう。彼地でも僕の返事を待つてゐるでせうから。』

さういつて、林は、やがて卓の方へいつて、そこでスーツケースの中から賴信紙を取り出して、誰れに宛てゝ打つのか、長い電文を書きだした。それを書いてしまふと、彼はベルを押してボーイを呼び、それを大急ぎで本局へもたせてやるやうに命じた。

林はもとの椅子へ返つて來ながら、

『ねえ、春江さん。それはさうと、これからあなた、どうします。銀座の店へいくんですか。』

春江は嬌態をして、

『私ね、もうさう極りましたら、一日だつてあんな店へ出るのは厭ですわ。私、もう今夜つからあ

すこを退き度いと思つてますのよ。』

『いや、そりやいゝ。それが一番いゝですよ。一日の惡は、一日の悔いを殘すことになりますからなあ。それぢやどうです。もう時分時ですから、これから食堂へいつて、一緒に飯でも食べようぢやないですか。それともあんた、何か差支へでもありますか。』

『いゝえ、私は構ひませんけど、あなたお忙がしいんでせう。』

『さ、僕は今夜は八時から一寸約束がありましてね。日本橋の龜島町までいきますけど、それまではあいてゐるんですよ。それぢや久振りにゆつくり飯でもたべませう。それともこゝの食堂ぢやあんまりお手輕すぎるから、何處かうまいものをたべさせる家へでもいきますかな。はゝゝゝゝ。』

『ほゝゝゝゝ。さうね。私、何んなら、西洋料理よりも、日本食の方がようございますわ。私達はもう朝から晩迄ラードの匂ひでせめたてられてますからね。ほゝゝゝゝ。』

『いや、こりやさうだな。つい氣がつかないで、失禮しましたね。なるほどあんた達は、皿ががちやりといつても、もううんざりするでせうからなあ。はゝゝゝゝ。』と、林は面白さうに笑つて、『そいぢや、とにかく自働車をさういはせて、戸外へ出てみようぢやないですか。僕も大阪へ定住する

やうになつてから、つい口が奢つてしまつてねえ。此方へ來ると、鰻とか鮨とかいつたやうなものには食慾を感じるが、その他のものは、一向いかんのですよ。今夜はひとつ、あんたのお伴で、鳥でもたべにいきませうかねえ。さうして、ゆつくり落着いて話しの出來るやうな家をさがすんですなあ。』

やがて林は自働車を命じて、春江を促がしながらホテルを出た。春江は風裝がみすぼらしいのでうつかりした家へは上れないと思つたが、林はそんなことは一向平氣で、とう〳〵彼女を築地の光川といふ鳥屋へ連れていつた。そこへはちよく〳〵いくとみえて、女中達は林のことを『旦那』『旦那』といつて下へも置かないやうにもてなした。

春江は飲むまいと思つてゐながら、つい盃を手にしてしまつたので、その晩も嬉しさにそゝられて、可成り醉ふほど飲んでしまつた。彼女は此頃では、日本酒なら四五合は平氣でやれるやうになつてゐた。

醉ふと春江は妙なムラ氣が出て、自分からあべこべに林を誘惑してみたいやうな心持ちになつてきた。今迄さんざ手古摺らせて、到頭そのまゝ別れてしまつた彼であるだけに、かうなつてみると

變に氣の毒なやうな氣もするし、一方又もうさうした境地に落ちた彼女としては、自分の肉體で、感謝の眞心を現はすより他はないといふやうな、變な氣持にもなつてくるのであつた。

林はそれでもなるべくその鋭鋒を避けるやうにしてゐた。彼は昔風な戀愛の美を說いて、それに深く憧憬の思ひを寄せてゐるやうに、態と話をそらしていつた。もう二度とは歸らない昔のなつかしい思ひ出を、今更こゝで無理に破壞してしまふのは苦しいといつて、彼は遂に春江の誘惑に乘つて來なかつた。

春江はその膝へ兩手をついて、

『林さん、堪忍して下さいね。』と、云つたつきり、しく〳〵聲を呑んで泣き出してしまふのであつた。

十八

いよ〳〵大阪へいくと極まると、春江はさすがに住み馴れた東京を去るのが、何んだか心殘りで耐らなかつた。併し又一方では、何處にしても住めば都だといふやうな氣もして、見も知らぬ初め

ての土地へいくのが、妙に嬉れしくもあつた。大阪へいけば、自分にはまるで新らしい生活が初まるのだ、さう思ふと、彼女は胸がわく〳〵してくるのであつた。

もう當分は、東京へ歸ることも出來ないのであるから、今度こそは、弟の榮次郎にも逢つて、ゆつくり別れを惜しみ度いと思つた。弟だつて、自分の境遇ががらりと變るのであるから、今度は氣持ちよく逢つてくれるだらうと思つて、春江は又柴田先生の家を訪ねて、懇々と賴んでみた。と、先生も大阪へいつてしまふと聞いては、逢はせない譯にもいかないので、丁度春江が立つ日の夕方彼女をわざ〳〵夕飯に招んでくれて、久々で榮次郎に會見させてくれたのであつた。

榮次郎はその年の夏、いよ〳〵學校の方も卒業したので、態度も顏つきもすつかり大人びてしまつてゐた。紺サージの脊廣を着て、頭をきちんと分けてゐる格好をみると春江はもう涙の方が先へ立つてしまふのであつた。

やがて奥さんの手料理で夕飯の御馳走が出たが、それがすむと、先生は二人をそのまゝ放つておいて、夫婦して子供達を連れて、近邊の妹婿の家へ遊びにいつてしまつた。それは無論、しばらくの時間でも、姉弟たつた二人で、ゆつくり話し合ふことが出來るやうにしてやらうといふ思ひやりの深い考へからであつた。

榮次郎は時計ばかり氣にしながら、

『ねえ、姉さん。それで、姉さんは何時の汽車でたつんですか。』と、訊く。

春江は笑つて、

『さあ、それがまだはつきりしないのよ。何んでも、林さんの方の用が八時にはすむつていふからそれ次第で時間が極まる筈になつてゐるの。』

『ぢやどうしたつて、九時半のになりますねえ。それだと僕困るなあ。』

『どうして。』

『どうしてつて、あの、研究所の方の門限が九時なんですもの。僕、東京驛へ送つていけなくなつてしまひますからねえ。』

『あら、榮ちやん。もうあんた送つてなんぞ來ないだつていゝわよ。あんた忙がしい體なんだから……。』

『いゝえ、用の方なら何んとでも都合をしますけど、僕のゐるところは、實に門限がやかましいん

でねえ。それで困るんですよ。貴重な藥品をつかふところでせう。ですから規則をみだすことが何よりも困るんですよ。』

『だからもうあんた、ほんとに送つてなんぞ來なくたつていゝわよ。とにかく先生のおかげで、私かうやつて久振りに逢へたんだもの。それだけで私、もういゝの。私、今夜はほんとに嬉しかつたわ。私、このうへ東京驛へ送つて來てくれたりすると、私、却つて又別れが辛くなつちやうわ。』と、春江はもう涙ぐんで、じツと弟の顏ばかりみながら、『ねえ、でもね、榮ちやん。あんたほんとに立派になつたわねえ。何遍云つても同じことだけど、私、あんたがさうやつてゐる姿をたつた一目でもいゝから、お亡りになつたお父様やお母様にみせ度いわ。さぞおよろこびになるでせうねえ。』と、いつて、鼻を啜る。

榮次郎も涙を一杯眼にためて、無理に笑ひながら、

『あのね、姉さん。この洋服はね、そら、いつか姉さんが澤山お金をもつて來て、先生のところへ預けていつてくれたでせう。あの殘りで、僕こさへたんですよ。』

『まあ、あんた、相變らずほんとに世帶もちがいゝわねえ。さうやつて坐つてゐるところは、お父

様のお若い時のお寫眞にそつくりだわ。血統つて爭はれないもんねえ。髭なんぞめつきり濃くなつて來たぢやないの。』

『もう僕も二十二ですからねえ。はゝゝゝゝ。』

『ほんとにねえ。もう二十二ねえ。さうかうしてゐるうちにや、もうお嫁さんも貰はなくちやならなくなるわ。全く世の中が變つてしまつたわねえ。』

『姉さん。僕それよりも、姉さんとかうやつて昔のやうに仲よく話しが出來るやうになつたのが、何より嬉しくつて耐らないんですよ。姉さんはほんとにいゝ人だから、いつか一度はきつと昔のやうな心持ちになつてくれるに違ひないと、僕、信じきつてはゐたんですけど、……でも、僕、今だから云ひますがねえ。そりや一時は隨分心配もしたんですよ。僕、せめて自分の居處だけでもどうかして報らせてあげようと、幾度さう思つたか知れないんですけど、先生が斷じてそんなことをしちやいけないつてさう仰有るんでねえ。實に先生つていふ方は、何んていふ慘酷な方だらうと思つて、勿體ない話だけど、僕、先生を心から恨んだこともあるんですよ。』

『ほんとにねえ。私だつてもよ。私も先生を恨んだことがあるわ。逢はせないんなら逢はせないで

いゝから、せめてあんたの居處位ゐは敎へて下すつてもいゝだらうと思つてねえ。』
『でも、姉さん。僕それでも、姉さんの家へはよく行つたんですよ。姉さんは知らないだらうけど僕、時々姉さんが何うしてゐるだらうと思つてねえ。一週間に二度位づつはこつそりあの洋服屋の前をぶらついてみたんです。僕、ひよつとして姉さんにみつかるといけないと思つてもうびくくもんでね。態と帽子を深くかぶつちや、あの前を通つてみたんです。それからカツフエ・ウイステリアの前も、ミラノの前も、それから孔雀の前も、僕、何度通つたか知れやしませんよ。』
『まあ、あんた、どうしてそんなことを知つてたんですの。誰れかに訊いたの。』
『え、僕、友達に賴んぢや、わざくコーヒーを飲みにいつて貰つて、姉さんの行先を先から先と突き留めて歩いたんです。それだから僕、姉さんのことはようく知つてたんですよ。』
『まあ、まるで探偵のやうねえ。でもあんた、そんなにまでしてくれたの。私、ほんとに嬉しいわ。』
榮次郎は何か思ひ出してゐるやうに、眼をしばたいて、
『あの、一度なんかはね、僕があのミラノの前を通ると姉さんがだしぬけに客を送つて出て來てね。

そりや面喰つちやつたんですよ。丁度あれは、去年のお正月の、大雪の降つた晩でした。その時分には、僕、本郷の金助町にゐたんで、あすこからなら、歩いていつたつて譯はないんです。でね、その晩は、何んだか、醉つた客が亂暴をしてゐるやうでしたから、僕、姉さんに萬一のことがあるといけないと思つて、友達と二人で、あすこの角の屋臺店のところへ、店が退けるまで立つて待つてゐたんですよ。とつても寒くつてねえ　でも、姉さんが十二時を打つと間もなく、無事に歸つていつたんで、僕ほツと安心してねえ。とうくく見え隱れにあとをつけて姉さんの家までいつてしまつたんですよ。姉さんはあの雪の中をずんくく歩いていつてしまふんでせう。僕、もう後から聲がかけ度くてねえ。僕、ほんとにあんな情ないことはありませんでしたよ。歩いてゐても、涙が出て來てしやうがなかつたんですもの。』
春江はそんな話を聞くともうとても我慢がしてゐられなかつた。榮次郎がさうまでに姉甲斐のないこの自分のことを思つてゐてくれたのかと思ふと、いくら泣いても泣ききれなかつた。
榮次郎はさんざそんな涙話をしたあとで、やがてふつと氣がついたやうに、
『ねえ、姉さん。それはさうと、今度の林さんの方は大丈夫なんでせうねえ。僕何んだか、心配に

なつてしやうがないんだけどなあ。』と、先刻から云ひ澁つてゐたことを、つい口へ出してしまふ。

春江は涙を拭きながら笑つて、

『そりやあんた、今度はもう大丈夫よ。先刻も話した通り、あの人もまるで昔とは變つてしまつたのよ。あんただつて、逢やあきつと驚くわ。』

『さうですかねえ。ほんとにさうだと、姉さんもこれから仕合はせになれるんだがなあ。でも、僕、遠いところだけに、何んだか氣がかりになるんですよ。』

『そんなにあんた、取越し苦勞をしだしたら、限りがないわ。もう私も、今度こそすつかり決心をきめてゐるから、お互にこれからうんと勉强しませうね。それが一番だわ。あんたもそのつもりで大いにやつてね。さうして月に二度づつはどんなことがあつても、きつと便りをしあふやうにしませうねえ。それだけは私堅く約束しとくわ。』

『そりや無論だけど、ねえ、姉さん、せめて年に二度や三度は東京へ歸つて來てくださいね。林さんと一緒にやつてくりや譯はないんだもの。それも約束していつてくれるでせう。』

名殘りはいつまでたつても盡きなかつた。姉弟はその晩ほどしみじみとした情愛を感じたことは

今迄に一度もなかつた。

十九

春江は、せめて丸の内ホテルまでも送つていくといつて聞かない榮次郎を、やつと宥めて、自動車で彼をあべこべに追分の研究所へ送つていつてやつた。研究所の暗い門の前で又しばらく名殘りを惜しんだあとで、彼女はもう時間がないので、大急ぎでホテルへやつて來た。

林の部屋へ上つてみると、彼はもう何から何までちやんと支度をして待つてゐて、

『やあ、大分別れが辛かつたやうですね。眼が腫れてゐるぢやないですか。はゝゝゝゝ。』と、笑つて、

『この鹽梅なら、九時三十分の神戸行に間に合ひさうだから、あんたもそろ〳〵支度をしてくれませんか。』と、落着きはらつていふ。

春江はもう息をきつて、そこいらをうろ〳〵して廻りながら、

『どうも遲くなつて、ほんとに相濟みません。弟がね、どうしても離さないもんですから。』と、早

口に云つて、『私はもうこのまゝすぐにでも立てるんですのよ。荷物はすつかりチエツキにしてしまひましたし、あと手提げだけもつていけばいゝんですもの。』

『いや、慌てゝ忘れものをしないやうにして下さいよ。まるで、ロケーションといふ格好ですね。はゝゝゝゝ。併しまあ、弟さんが離さんのなら無事ですよ。これが他の男で後髪をひかれるんぢやねえ。はゝゝゝゝ。』林は馬鹿に機嫌がよかつた。

春江も色めかしい嬌態をして、

『あら、厭だ。そんな人がある位なら、私、大阪三界まで落ちていきやいたしませんわ。かうなると、ひとりものは實にさばさばしたもんですわねえ。ほゝゝゝゝ。』と、浮々しながら笑つて、

『ほんとに、あんたの仰有るやうに、一寸ロケーションにでもいくやうな感じがしますわねえ。お互にやつぱり昔は忘れられませんわねえ。活動つてものは何處かやつぱりチヤームがありますわ。ほゝゝゝゝ。』

『いや、僕にしたつて、あの時分のことは到底忘れられませんよ。あんたと違つて、僕にはどうせろくな思ひ出はないんだが、それでも忘れられないですよ。懐かしき青春といふやうな感じがしま

すからなあ。』

『昨夜もね、私、一寸銀座へいきましたらね。途中で花園八重子さんに逢つたんですのよ。あの人も此頃ぢやボツブヘアか何かで、すつかりモダーンになつちまつてねえ。碁盤縞のスカートか何んかはいちやつて、とても凄い風姿をしてましたわ。』と、いつて、春江はふツと思ひ出したやうに、

『あゝ、さう〳〵。私、あんたにお眼にかゝつたら、すぐにお話しようと思つてゐて、つい忘れてましたわ。あの、そら例の友子さんね。あの人つい此間、撮影所をひいたんですつてね。』

林もきよとりとした顔で、

『へえ、あの人はそれでもまだ蒲田にゐたんですか。此頃ちつとも畫をこしらへないやうぢやありませんか。僕は又何處かのプロダクションへでも流れていつて、苦勞してゐるんぢやないかと思つてたんだが、そいぢや相變らずなんですね。あの人も丁度といふところで、賣り損つてしまひましたねえ。』

『ところがねえ、あなた、私花園さんに聞いて、ほんとに吃驚しちやつたんですのよ。あの人、去年から肺病になつちやつて、それで撮影所をひいたんですつてね。あんなデブさんが、どうしてそ

んな肺病なんかになつたんでせうねえ。人はみかけによらないもんですわねえ。ほゝゝゝゝ。』

『いや、さういへば、あの人は何處か、かう皮薄なところがありましたからなあ。それにあゝ達者に發展しちや、肺病にもなりますよ。男にかけちや大した人でしたからなあ。』

林はさういひながら後へ反つてさも可笑しさうにあはゝゝ笑ひだしたが、その時、部屋附きのボーイがどうしたのかだしぬけに扉をノツクして、此方の返事も待たずにつか〳〵入つて來た。もう汽車の時間が迫つて來たので、荷物でも取りにきたのだらうと思つて、林もひよいと何氣なく椅子から立ち上つたが、とみると、開いた扉の影のところには、脊廣を着た眼の鋭い男が三人ばかり立披つてゐて、それッといふやうに、ばら〳〵ッと室内へ跳り込んできて、矢庭に林の前後を取圍んでしまつた。

林はあんまり不意打ちだつたので、悸乎としたやうに思はず窓際の方へ一足退つたが、彼はみる〳〵面色土のごとくに變つて、兩手をだらりと垂らしながら、喘ぐやうな聲で、

『やあ、皆さん、御用の次第はよく分つてゐます。もう逃げ隱れはしませんから、どうか靜かにすつて下さい。』と、早口にいふ。

と、その中の一人は、にたりと笑つて、

『おい、貴樣。九時三十分のに、乘るつもりだつたんだつてなあ。』と、いふ。

林は恨めしさうに、その顏をじろりとみて、

『は、さうです。八時四十分のに乘りや、私もうまく透せたんですが、やつぱり運がなかつたんですな。あいにく連れが遲れたもんですから、實に殘念でした。もう仕方がありません。』と、いつて白い眼で春江の方を睨みながら、無理に笑つたが、その顏は寧ろ凄かつた。

三人の男も、呆氣にとられて茫然としてゐる春江の方をかはるがはるにみながら一番前に立つた一人は、

『いや、さううまくは問屋が卸ろさんよ。貴樣は警察を馬鹿にしとるやうだが、もう昨日からちやんと手が廻つて、我々はもう午後の五時から、こゝへ張込んでをつたんだからな。』

林は存外落着いて、

『さうでしたか。いや、いろ〳〵お手數をかけました。いづれにせよ、私ももういよ〳〵年貢のをさめ時です。今度は全くヘマをやつちまひました。もう大阪をたつ時から、私は變に蟲がしらせて

ゐましてね。』と、彼は何處か不逞に笑つて、四邊を見廻はしながら、『もうかうなつちや全く手も足も出ませんよ。今すぐにお伴をしますから、どうか一寸待つて下さい。煙草を吸つていかないともうこれが當分のお名殘りですからなあ。』と、笑ひながら云つて、彼は態と春江の方へ歩み寄つてきて、さあらぬ風で、彼女の顏をみながら、ポケツトへそツと手を突ツ込んだ。

煙草の入ものでも出すのかと思つて、皆がうつかりしてゐると、林はやがてそこから黑い棒のやうなものをひよいとつかみだしたが、もうその次の瞬間には、異樣な息の塞るやうな恐ろしい爆音が、ばアんと彼の手中から起つて、彼の横に慄へながら立つてゐた春江は、それと同時に、口もきかずに前のめりに飽氣もなくくたくと倒れてしまつた。

『あツ、やつたなツ』と、誰れかが叫んで、すぐさま林の肩へ躍りかゝらうとしたが、彼はそれを卓で巧みにはぐみながら、今度は眼にも留らぬ早さで自分の額へその拳銃を擬して、一寸眼をつぶつたかと思ふと第二彈で彼は見事に前頭部を撃つて、仰向けにばたりと倒れてしまつた。その間それこそあツといふ間もないほど彼は手際よく、敏捷にやつてのけたのであつた。

刑事達はあべこべに啞然として立竦んでしまつた。

二十

小說家の原田は、それからまる四年を經過した今年の五月になつて、初めて衣川春江がさうした非業の最期をとげたことを知つたのであつた。新聞の好きな彼が、それほどのニュースをまんまと見逃がしたといふことは實に迂濶極まる話であつた。尤もその當時は、某重大事件が勃發してゐる最中であつたので、どの新聞も取りたてゝ紙面をふさぐほどの記事にもしなかつたのであつた。

原田は五月の或る日、突然、關東製藥株式會社の專務をしてゐる尾崎といふ男の訪問を受けた。その尾崎は、彼の中學時代からの同窓であつたが、平常は滅多に逢ふこともなかつたのに、何を思ひ出したのか、彼はひよつくり手土產なぞをもつて原田の家へやつて來たのであつた。

尾崎の用向きは至極簡單であつた。何んでも尾崎の會社の若い技師が、今度動物の臟器から强力なホルモン劑を抽出することに成功したので、それを大々的に宣傳して販賣するために、彼はこの宣傳文を書いてくれといふのであつた。

原田は笑つて、

『いや、どうもそれは驚いたな。僕はそんな仕事で今頃君に利用されようとは思はなかつたよ。はゝゝゝゝ。併し專門違ひの僕のところなぞへ、そんなものを持ち込んできて何うするんだね。さういふ文章は、當てずツぽぢやかけんからねえ。』

尾崎は香の高い葉卷をくゆらしながら、昔から癖の、眼をぱちぱちやりながら、

『いや、ところがね、もう此頃は、博士の名前なんぞやたらと並べてみたつて、一向世間ぢや珍らしがつてくれんからね。それよりも君の名文章で、寸鐵殺人的にやつてもらふ方がはるかに宣傳力があるんだよ。僕は忙がしいから君の小說なんか一つも讀んでをらんが、會社の連中のなかにや、隨分愛讀者がゐてね。さういふものならあの人に賴むのが一番いゝつていふもんだから、僕がかうやつて臆面もなく使者に立つた譯さ。どうか、昔の友達甲斐にひとつやつてくれんか。』

『はゝゝゝゝ。一寸廢物利用といふ形だな。いや、併し、そりや社會民衆の利福を增進するためなら、僕だつて大いに頭をしぼつて書いてやるがね。一體その藥といふのは、どういふ病氣にきくんだね。』

尾崎は眉をあげて、額一杯に皺をよせながら、

『そりや君、實に大したもんなんだよ。一番卓効のあるのは、先づ糖尿だね。それから腎臟にもいいし、心臟にもきくと、まあ、かういふ譯なんだ。實際誇張はぬきにしても、たしかに世界の製藥界を驚ろかすに足るもんなんだ。何にしろ、大學の福田博士までが折紙をつけてくれたんだからねえ。』

『ふむ、あの氣むづかしい先生がねえ。』

『さうさ。あの福田博士が今度の學會で報告をしてくれるつていふ位だから、藥の眞價は推して知るべしさ。それに最近は臟器藥の全盛時代だからね。これで僕の會社もいよ〳〵釜を起すよ。はゝゝゝゝ。いや、それが君、まだやつと二十七になつたばかりの青年技師がやつたんだから腹がたつぢやないか。その男は一寸他に類のない腕をもつてゐるんだが、併し今度は全くすばらしいことをやつてくれたよ。もうとにかく我々老骨のはびこる時代ぢやないね。若い奴にやとても敵はんよ。』

と、彼はその技師のことばかり讃めそやしてゐた。

それから四五日經つて、やつとその宣傳文が出來上つたので、原田は散步がてらそれを尾崎の會社へもつていつてやつた。彼のオフイスは日本橋の室町にあつて、中々立派な建物であつた。

尾崎はひどく喜んで、早速彼の原稿をタイプライターの方へ廻はした。それと一緒に彼は、隣りの室から脊廣を着た一人の若い男を引張つてきて、これが例の青年技師だといつて自分の息子でも自慢するやうに原田に紹介した。それはいかにも溫和しさうな人柄のいゝ男なので、話し好きな原田はそれから重役室で、その技師とすつかり話し込んでしまつた。平常からさういふ方面のことにも充分興味をもつてゐる彼のことゝて、話は先から先とひろがつて、果てしがなかつた。

そこへ尾崎へ面會人があるといつて來たので、彼は一寸失禮するといつて、廊下の方へ出ていつた。その留守に、その技師は、さも云ひ憎さうにもぢ〳〵しながら、

『あの、先生、突然こんなことを申上げて何んですが、あの、先生はずつと以前に蒲田にをつた衣川春江といふ映畫女優を御記憶になつて被居りやしませんでせうか』と、訊く。

原田は怪訝な顏で、

『衣川春江、あ、知つてゐますよ。たしか仙臺邊から來た女でしたなあ。あれは一度僕の家へやつて來たことがあるんですよ。まだ蒲田へ入る前だつたんで、僕、いろ〳〵忠告したことなぞもあるんだが、……』と、いつたが、技師は恥かしさうに笑つて、

『は、たしか、東京へ出てまゐりますとすぐに先生のところへお邪魔をして、大變御訓戒をうけたなんていつてをりましたが、あの、實は、あれは私の實の姉なんでございますよ。』

よく聞いてみると、その青年技師こそ、春江の弟であるあの榮次郎なのであつた。

原田は今更のやうに驚いて、眼を睜つてゐた。彼はその時、榮次郎の口から、初めて春江が射殺された當時の狀況を詳しく聞いたのであつたが、あんまり思ひがけないので、まじ〳〵しながら

『ほう、あの人はそんな悲慘な死に方をしたんですかねえ。いや、僕は今迄ちつともそんなことは知らなかつたんですよ。第一あなたがあの人の弟さんだつていふのも實に不思議だが、併しあの人がそんな最期をとげたといふのもまるで夢のやうな話ぢやありませんか。實際世の中には、思ひもつかないことがあるもんですなあ。我々のやうな職業をしてゐるものでさへ、想像も及ばんやうな事實があるんですなあ。』と、しきりに感じ入つて、『それぢやつまり姉さんは、あの林といふ男のために、行懸けの駄賃にやられてしまつた譯なんですなあ。』

榮次郎は眼を伏せて、

『まあつまりさうなんです。あとで聞くと、林はその當時、大阪の土地會社の名を利用して、大仕

懸けの詐僞をやつてゐましたんださうです。そこへ俄かに手が入つたんで、彼奴ももう自棄になつて、その場に居合はせた姉まで道連につれていつた譯なんです。』

『そりや馬鹿々々しい目に逢つたもんですなあ。さういへば、僕姉さんが神田のカツフエにゐた時分に、一度逢つたことがあるんだが、その頃には姉さんも隨分人柄が變つてゐましたからなあ。その後ずつとやつぱりあゝいふ職業をしてゐたんですか。』

『え、丁度三年ほどぶら〳〵してゐまして、やつとまああゝいふところから足が洗へるといふんで姉もひどく嬉んでゐましたんですが、到頭そのまゝになつてしまひました。實際馬鹿をみたのは姉で、ほんとに僕、今でも思ひ出すと、姉が可哀想でならんのです。』と、云つて榮次郎は往時を追懷するやうに悲しげな眼つきになりながら、『尤も姉はあの時に拳銃でやられなくても、どうせ林と一緒に大阪へいつてゐりや、もつと〳〵ひどい目に逢はされたかも知れませんけど、……』

『いや、あの林といふ男は實に惡黨でしたからなあ。僕も彼奴にや、ロケーション先でえらい目に逢はされた經驗があるんですよ。彼奴は盜賊ぐらゐ平氣でやる男でしたからなあ。』

『それに林は詐僞の他にも、婦女拐誘の常習犯だつたんださうでしてねえ。何んでも上海や香港と

連絡をとつて、さかんに女を誘拐して歩いて居をたんださうですよ。ですから姉なんかも一度引懸つたが最後、あんな正直な、純な人間でしたから、それこそどんなことになつたか分らないんです。上海へでも賣られりや、それこそ死ぬよりもつともつと酷い目に逢はされたかも知れませんからな。』

『ふむ、そんなこともやつとつたんですかねえ。あんな奴だから一度刑務所へ入つてから却つて手が上つたんですなあ。實に恐い奴だ。あゝいふのは、先天的にもう道德意識が缺除してゐるんですな。』と、云つて、原田は嘆息をつきながら、『いや、しかしまあ、今から何んといつてももう追ツつかん話だ。だん〳〵お話を聞いてみると、あなたの御成功の陰には、姉さんといふ大きな犧牲があつた譯なんですなあ。姉さんはお氣の毒だが、併しさうなつたのもやつぱり不可抗な運命だつたんですよ。結局この人生には、明るい朝を感じさせるために、暗い夜があるんですからなあ。さう思つて諦めるより他はないですよ。』

榮次郎は聲を落として、

『そりやもう私もこの頃ではすつかりあきらめてはゐますんですけど、やつぱり時々耐らなくなる

ことがあるんです。つい此間、私、久振りで郷里の方へ歸りましたんで、その時に姉の遺骨を一緒にもつて歸りまして、父や母の傍へ埋めてやりましたんです。姉も今頃はきつとさぞ嬉んでゐてくれるだらう思ふんです。今から考へますと、姉は全く私の爲めに半生を犧牲にしてくれたやうなもので、私には時がたつてみて、初めて何も彼もよく分つて來ましたんです。』

『そりや考へやうによつては、さうも考へられますなあ。姉さんがさういふ境涯へ落ちたのも、結局あなたのためだといへば云へないこともありませんからなあ。あなたが始終姉さんの傍にゐて上げれば、姉さんだつてそんな死に方はしなかつたに相違ないが、併しさうなりや今度はあべこべにあなたの方が今日のやうな成功は得られないことになりますからなあ。』

『いや、併し先生、私は、私の血管の中に、今でも姉の血が流れてゐるのをはつきり感じてゐるんです。それから姉の精神も私の精神の中で活躍してゐると私は堅く信じてをります。私は今自分の專門として血液といふものゝ研究をやつてをりますが、血球の型といふやうなものを考へると、實に愉快なんです。まだ實驗的にはさういふ事實を證明することは出來ませんが、併し私は原理的にはそれを直感することが出來るんです。ですから私がこれから一生懸命に努力をして、この社會のために又日本の學界のために少しでも貢献することが出來たら、きつと姉も冥々の裡にその歡びを味はつてくれるに相違ないのです。私はまだ若いんですから、これからはもう一層發奮して大いにやらなければならないと思つてゐるんです。姉の犧牲を少しでも意義のあるものにしてやるためには、私自身が立派な仕事を殘さなけりやならないんです。さうして早く私達は心の黎明を仰ぎ度いんです。私の胸の中に生きてゐる姉に、どうかして明るい靈魂の朝を感じさせてやり度いんです。』

さういつて若い技師は涙ぐんだ眼で自信ありげに、賑やかな街路の方を見下ろした。

そこには午後二時の白日が隈もなく照り輝いてゐた。鈴懸の街路樹にはもうつすりと綠の新芽がふいて、柔かい風は細かい枝をちらほらゆすぶつていく。勇敢なる生への行進曲のやうな大都會の噪音は、明るい蒼空の映つた窓硝子の面でぴち〳〵と勢よく鳴り響いて、何も彼もがもう力一杯に呼吸しながら、爽やかに生きて躍つてゐた。

そこへ尾崎が今度榮次郎の製出した『レーヴリン』の大きなポスターを兩手で掲げながら飛び込んで來て、

『やあ、衣川君　やつと出來た。やつと出來たよ。』と、叫んで、小兒のやうにニコ〳〵しながら、

さも嬉れしさうにそこいらにゐる人達に見せびらかして廻つた。

五色刷りの美しいそのポスターにも、榮次郎の笑顔にも、明るい五月の空の光がきら〳〵輝いてゐた。

女樂士

女樂士

徳枝が斷髪にならうと思ひ立つたのは、もう三月も前からのことであつた。今日はやらう、明日はやらうと思つてゐるうちに、だんだん日が經つてしまつた。それも彼女が自分の頭髪に對して愛惜の念をもつてゐるからではなかつた。彼女も此頃は、常設館の方が手不足で、朝の十一時から、晩、閉場るまで、ずうツとつかまつてゐるので、自分の時間と云つては殆んどないのであつた。それに例の朝寝なので、實際はお風呂へいく暇もなかつた。その爲めに彼女は、自分では思ひながらも斷髪を決行する機會がなかつた。

六人ゐる親しい朋輩の中で、もう三人は斷髪になつてゐた。樂士の中にも、それから女案内人の中にも思ひ切りよく斷つたのがゐた。その連中の云ふところを聞くと、誰しも皆斷髪を讃美した。第一モダーン型で、見た眼の感じがいゝ。それからしげしげ髪を洗ふ必要がないのと、髪飾りや、髪結ひなんぞで苦勞をしなくても濟むし、何よりも經濟で、氣持ちがよくつて、そりやとてもいゝ

といふのであつた。つまり男櫛が一枚と、手鋏が一丁と、それに燒鏝がひとつあればもう他には何んにも要らないのであるから、極めて簡單で、手數がかゝらなかつた。

徳枝は夜寢ると、いつも斷髪になつたあとの自分の姿形を空想してみた。あんたは頭が丸いからきつと斷髪になつたらよく似合ふと皆も云つてくれた。少し長めに耳の下あたりから斷つて、ウエーブをかけて、あの好きな濃いグリーンの洋裝をやつたら、さぞ綺麗にコケツトにみえるだらう。まるでバンキイのやうだらう。さう思ふと、彼女はきつと明日は時間をみて、理髪師のところへ行かうと、さう思ひ思ひ、うとうとゝ深い眠りに落ちてしまふのであつた。

そのうちに二人の男から貰ひためた金で、どうやら洋服の方が先へ出來てしまつた。服地は館へよくやつて來る肴町の子供服屋から割安なものを買つて貰つたし、仕立は階下の菓子屋の姪で、裁縫學院へ通つてゐるのが縫つてくれたので、彼女としてはひどく氣に入つた形のが出來上つた。下着やシュミーズなぞはレイヨンのやつが欲しかつたが、金の都合でそこまでは手が伸びなかつた。靴も今穿いてゐるのが何うやら間に合ふので、それでしばらく我慢をすることにした。

さて身裝へが出來てみると、徳枝は一日も早く髪の處分にかゝり度かつた。何んだか、自分でも

うづうづするやうな氣がした。そのうちに丁度折好く、映寫ものゝ都合で、晝間は和樂の方の連中が受持つことになつたので、實は昨日から、午後の間三時間ほど樂が出來るやうになつた。徳枝はすつかり嬉しくなつて、今日は館から一度家へ歸つて來ると、すぐさま、始終襟脚なぞを剃つて貰ふ近邊の理髪屋へ出懸けていつた。

理髪屋はまるで空いてゐた。明るい日のあたる窓のところへ主人から下剃りまで集まつて、頻に將棋をさしてゐた。主人の白い被衣には鐵格子の棧が縞のやうにうつつて、冬の蠅が二疋ほど頭のうへで舞つてゐた。

徳枝が入つていくと、主人はふと顔をあげて、心易だてに、

「おや、被來い。今日は休みかね。」と、福島訛のある調子でいふ。

徳枝は唇を歪めてにいツと齒を出して笑ひながら、

「あら、休みぢやないわよ。一寸暇が出來たから來たのよ。」と、云つて妙にせかせかしながら、「あの、直ぐにやつて貰へて。」と、いふ。

主人はもつてゐた長煙管を卓のうへゝ置いて、

「お急ぎなら、すぐにやつて上げよう。さあ、此方へおかけなさい。あんた、顏剃りだね。」と、もう前懸をはたきながらいふ。

徳枝は大きな鏡の前の廻轉椅子へ、どかりと不器用に腰を下ろしながら、ひどく得意さうに、

「ねえ、あんた。今日は私、顏剃りぢやないわよ。私ね、今日は思ひ切つて、斷髪にして貰はふと思つてね、それで來たの。此間、館の小林さんがやつて貰つたでせう。あれ馬鹿に格好がよかつたから、どうか私のもあれと同じやうにやつてくれない。」

主人はにやりとして、無遠慮に、

「はゝゝゝゝ。あんたもやるのかね。此頃ぢや猫もしやくしも、流行もんだかんなあ。あんたなんざ、こんないゝ毛をもつてんのに、親あ泣くぜ。」

「いゝわよ。親なんざないんだから。」と、不貞腐れに云つて徳枝は鏡に映る自分の顏ばかりみてゐた。

主人は自分では進まないらしく、

「ほんとに惜いもんだよ。後で後悔しますぜ。」なぞと云ひながら、綺麗に結ひ上げてあるみすゞ卷

を、とみ、かうみしてゐたが、やがて先づその髪から一つひとつ解いて、湯を含ませたタオルをもつて來て、それで上から濕しながらそろそろ仕事にかゝつた。

主人はいろんな無駄口をきゝながら目の細い櫛で、小口から頭髪をそろへては、チヨキリチヨキり截つていつた。鋏の音がすぐ耳の近くで、冷たくチヤリチヤリと鳴つた。その度に、徳枝は頭が輕くなつていくやうで、何とはなしに快い氣持ちであつた。長い間、いろんな髷に結つたりして、毎朝必ず手に觸れてゐた頭髪が、およそ三分の二ほども無雜作にきりとられていくのをみても、彼女はさう大して惜しいといふやうな氣もしなかつた。惜しいと感じられても、すぐに何か自分で勝手な云ひ譯をくツつけてさうした感じを紛らかしてしまふのであつた。唯あの長い髪の毛を主人はどう處分するだらう。まさかバリカンで刈つた毛と一緒に、床のうへゝは投り出すまいと、そんなことに可笑しな好奇心を覺えてゐた。

主人は耳のまはりだけ刈つてしまふと、櫛と一緒に持ち添へてゐた長い黑髪を一束にして徳枝の眼の前へ突き出しながら、

「あんた、どうですい。かうなつてみると惜しいやうな氣がしねえかね。だがもう何んてつても、

追附かねえかんね。」と云つて、うすく笑ひながらその髪毛を鏡の前の棚へ置く。

徳枝は平氣な顏で、

「あら、私、ちつとも惜しかないわ。でもさうやつてみると、隨分長いのねえ。かもじ屋へでも賣つてやるといゝわ。」

「はゝゝゝゝ。笑談でせう。こんなものを何んでかもじ屋が引取るもんかね。一貫目四十錢で、このまゝ梳毛屋へ下がるのさ。呆氣のねえもんさねえ。」と、云つて、彼は廻轉椅子ごと少し斜にふりながら、「さあ、今度は後だ。この盆の窪んとこは何うしようねえ。バリカンでやつとくか。それとも剃刀を使はふかね。」

「さうねえ。小林さんのは何うして。あの人の通りにして下さいな。」

「小林さんのは剃刀であたつたよ。そいぢやあんたのもさうしませう。だが、あたつたら、どうしたつて月に三度は來てくれなくちやいけないねえ。こゝが伸びると、爺むさくつて、まるで河童小僧が化けたやうになるかんなあ。後からみて、全く色氣がなくなるんでねえ。」と、主人は笑ひもしずにいふ。

徳枝は何んだか、首筋が急に寒くなつて來たやうな氣持がした。頭が擽つたいやうな、浮いてゐるやうな、實に變梃な感じであつた。頭を一寸動かしても、毛の捌きが可笑しいほど輕くて、斷り揃へた毛先が肌へ觸るのが氣味が惡かつた。

彼女の椅子の廻りには、いつの間にか下剃達が集つて來て、いろんな馬鹿口をきいては冷評すのであつた。

徳枝は理髮屋からその足で湯屋へ廻つて、もう日が落ちかゝる頃に、慌てゝ家へ歸つて來た。階下の内儀さんはすつかり顏違ひがした徳枝をみると、呆れたやうに眼を丸くして、店の薄闇から、

「あら、まあ、到頭あんた切つちまつたのねえ。今時の人はほんとに思ひ切りが早いのねえ。」と、笑へもしないやうに云ふ。

徳枝は可笑しさうに笑つて、

「でもいゝでせう。ねえ、小母さん。そりやさつぱりしていゝわ。こんなだつたら何故早く私、きらなかつたかと思つてねえ」と、いつて、綺麗に鏝をあてた頭を得意げに振つてみせる。

内儀さんは無理に微笑んでみせるばかりであつた。

徳枝はそれから自分の借りてゐる二階の六疊へ上つて、大急ぎで化粧をはじめた。どうもいつもより白粉を濃くしないと似合はないやうな氣がするし、それに黛も太めに引かないと顏の折合ひがつかないやうなので、徳枝は電燈をつけて頻りに鼻を叩いたり、頰を撫で廻したりしてゐた。

そのうちに館へ出る時間が漸次迫つて來るので、彼女はやつと諦めをつけて、今度は洋服に着換へ出した。下に着るものは未だ揃つてゐないので、有合はせで間に合はせて、どうやらかうやら仕立て下ろしの洋服を着たが、どうやつても都腰卷がスカートからはみ出る。徳枝は焦れて、安全ピンでやつと揚げをあげ、見た眼の體裁だけは繕ふことが出來た。

すつかり支度が出來上ると、彼女はもう一度鏡臺の前へいつて、自分の姿をみた。何んとも云へない幸福な滿足で、彼女の胸は一杯になつてきた。彼女はやがて、ヴアイオリンを入れたケースを小脇にかゝへて、そのまゝ家を出た。

往來へ出てみると、もう軒並の店屋には軒燈が明るくともつてゐる。西の方の空には夕映が消えかゝつて、電信柱だけが黑々と空高く突ツ立つてゐる。寒い風はぼうツと砂塵をあげながら吹きつ

けて來たが、徳枝はさう寒いとも思はなかつた。いつもと違つて、何がなしに身輕で、歩調もはきはきしてゐた。いくらとつとゝ歩いても、裾捌きが自由で、今迄の自分とはまるで別人になつたやうに思はれた。摺れ違つていく人達にぢろりぢろりと見られるのまでが、彼女には此のうへもなく嬉しいのであつた。

徳枝は賑かな大通へ出ると、歩道の眞中をこれみよがしに歩きながら、今夜は誰に逢つてやらうかとそればかり考へてゐた。鹽町の時計屋の店員である深井が今では一番眼星い相手であつたが、今夜は何故か深井には逢ひ度くなかつた。それよりも慶應の大學部にゐる波多野――それはまだ若い學生でマンドリンに凝つてゐる青年であつた。徳枝はいつも波多野とは聚芳樓といふ支那料理屋で逢ふことになつてゐるので、今夜はいつそあの波多野に呼出しをかけてやらうと思つた。波多野なら前から斷髮にしろとあんなに云つてゐたのであるから、逢つてもきつと逢ひ榮えがするに相違ない。さう思ひつくと、徳枝は急に胸がどきどきして、矢も楯も耐らなくなつてきた。

徳枝は館から電話をかけると叉事務員が煩いので、いつもよく行く洋菓子屋へ寄つた。そして申譯にボンボンを少しばかり買つて、電話をかりた。波多野は親戚に當る醫者の家へ厄介になつてゐ

るので、電話口へ出ることはあまり好まなかつたが、その晩は何うしたのか女の聲でかけたのに、直ぐに出て來た。

徳枝は浮々した聲で、

「あら、あんた、波多野さん、私分つて。よく今頃家にゐたわねえ。」と、笑ひながらいふ。

と、波多野はいつになくおほツぴらな調子で、

「やあ、分つたよ。今日はね、家のものが皆で葉山へいつたんだよ。伯母が工合ひが惡いんでね。それで僕、留守番を仰つかつてるんだよ。」

「まあ、そいでなのね。いつも今頃家にゐるあんたぢやないのに、珍らしいわねえ。今夜どう。出て來られない。」

「さあ、もうぢき誰か歸つて來るだらうとは思ふんだが、……それよりも君は何うしたんだい。今日は彼方はサボか。」

「いゝえ、どう致しまして。これから行つて、「天國と地獄」だけ彈きや、もう體があくのよ。だからあんた、後生だから出て來てよ。私、是非あんたに見せ度いものがあるんだもの。」

波多野は笑つて、

「はゝゝゝゝ。又その手で釣り出さうといふんだらう。もうその手にや乘らないよ。」

「あら、隨分ねえ。私、そんなこと嘘よ。今夜こそほんとに見て貰ふもんがあるんだつてばさ。」

「はゝゝゝ。有難う。又いづれそのうちにね。」

「あら、憎らしい。私、急いでゐんだから、そんなに焦らさないでよう。ほんとに厭だわ。」

「いや、焦らす譯ぢやないが、併し今夜は失禮させて貰はふ。それとも此方の條件を聞いてくれりや、何んとかしないもんでもないがね。」

「あれだ。厭な人ねえ。條件て何よう。」

「條件ていふのはね、今夜君泊るかつていふのさ。」

「あら、あんた、電話口でそんなこと云つていゝの。お宅の方が聞いてやしなくつて。」

「いや、大丈夫。こゝのまはりにや誰もゐないから、何を云つたつて平氣なんだよ。ほんとに君、さうしろよ。さうすりや君の云ふやうに僕出ていくがなあ。」

「そりやあんた。あんたが出て來て下さりさへすりや、私、何うでもするわ。兎に角、出て被來い

よ。もう館へ來てくれなくつてもいゝから、いつものとこで待つてゝね。よくつて。いゝわねえ。」

「はゝゝゝゝ。一人で極めてゐねえ。一體今夜は何時にカブるんだい。」

「さあ、カブるのは十時半頃だけど、私は休憩から先は何んにも用がないんだから、さうねえ、九時一寸過ぎには體があくわ。さうしたら、すぐにいつもの、彼處ね。彼處へいくから、あんた、待つてゝ。二階でなくつちやあいやよ。きつと來るわね。よくつて。」

波多野は愚圖々々云ひながらも、到頭出懸けて來ることになつて電話を切つてしまつた。徳枝はよつぽど斷髪にしたことを匂はせようかと思つたが、併し逢ふまで樂しみにして置く方が面白いと思つて、何んにも云はなかつた。波多野があツと云つて驚く樣が、彼女には又ひとつの樂しみなのであつた。氣の好い、飄輕な青年なので、今夜はまたきつと腹を抱へるやうなことがあるだらうと思つて、徳枝はまだ逢はない先から、ひどく氣が浮はついてくるのであつた。

徳枝が勤めてゐる館は、そこからもう一つ四辻を越えると、だらだら坂の中途のところにあつた。つひ去年までは、松竹の直營館であつたが、町の金貸しの一人が金主になつたので、今では獨立經營になつて、客足も相當によかつた。最近表の模樣がへをしたり、特等の坐席へ手入れをしたりし

たので、先とは見違へる程綺麗にもなつたし、一體に他の館に較べて手當なぞも幾らかよかつた。徳枝はもう松竹專屬の時代から、そこのオーケストラ・ボツクスで、ヴアイオリンを彈いてゐるのであつた。

館では丁度明日が映畫のかはり目なので、その晩は外からみても客足が薄いのが分つた。今は劍俠ものが一本と、正喜劇が一本、それに「西部の狼」がかゝつてゐて、「西部の狼」では相當に客を呼んだのであつた。併しこゝいらではいくら滿員をとつても、とても封切ものをかけるだけの資力はないので、一週間とはもたなかつた。

館の前のスチールのところには、明るい電燈が寂しく輝いてゐた。いつもは三人でも四人でも往來の人がその前へ立つて、馬鹿な顏をして客寄せの寫眞をみてゐるのに、今夜はがらんとして人影さへなかつた。四日ばかり前に降つた雪が泥まみれになつて殘つてゐる側では、子供達が凍りついた路面でスケートの眞似をしながらぎやあぎやあ騒いでゐた。一軒置いて先の魚屋からは腥い魚の匂ひが薄寒く漂つて來て、角に屋臺を下ろしてゐるお好み燒のまはりにも女の子が二三人、ぬき袖をしながら立つてゐた。

徳枝は一寸下足の方を覗いてから、すぐ手前の庇間になつてゐる露路へ入つて行つた。時間が遲れたらうと思つて内々心配しながらやつて來たのに、ステージではまだ劍俠ものゝ殘りをまはしてゐるとみえて、三味線や笛の音がもの悲しく聞えてゐる。それはヨタものゝ長唄をやつてゐるのであつた。「鶴龜」のやうでもあり、「石橋」のやうでもあるといふ程度の代ものであつた。

徳枝はまあよかつたと思つて、眞暗な露路の突當りにある辯士や、樂士の入り口からこつそり入つていつた。樂士部屋へ入るのには厭でも辯士部屋をぬけていかなければならないので、下駄箱の傍の扉をあけると、中はもうもうとした煙草の烟で、その中に主任の畑靜波や、その次席の金波や夢郎なぞが、一人の老人を相手に、何やら呑氣な笑談口をきいてゐた。その老人は例の金主の金貸で、毎晩かうやつてその日の上りをとりに來るのであつた。

眞先に聲をかけたのは出口に近いところに腰をかけた金波であつた。彼は色の眞蒼な、口の恐ろしく臭い男で、もう梅毒で聲がつぶれかゝつてゐるのを、始終濕布で押へて、變ないきみ聲をだしてはやつとお茶を濁してゐるのであつた。その癖、一番口は減らなかつた。

彼は大きな口を開けて、

「よう。これは驚いたね。誰れかと思つたら何あんだ、徳ちやんか。はゝゝゝゝゝ。いよう。すつかりモダンガールだねえ。一體何うしたつて云ふんだね。」と、いつて、身を開く。

靜波も煙草の烟が眼にしみるのを押へながら、

「はゝゝゝゝゝ。これは驚いたな。笑談ぢやありませんぜ。よくも化けたねえ。はゝゝゝゝ。」と、片眼でぢろぢろ見上げ、見下ろしながら、呆れてゐる。

徳枝は臆面もなく前へしやしやり出て、カンカン炭火の熾つた大火鉢へ手をかざしながら、

「そいでもよく似合ふでせう。畑さん、又もう一度惚れ直さない。ほゝゝゝゝゝ。」と、蓮葉に云ふ。

靜波は手帛で涙を拭いて、

「いや、有難う。もう澤山だよ。徳ちやんにや私も恐れをなしてるからね。はゝゝゝゝ。いや、それにしても、いさゝか度膽をぬかれたねえ。先刻歸る時にや何んでもなかつたが、いくら化けるにしても、ちつと早間すぎるなあ。」

「あれからあんた、大急ぎで床屋へ行つて、お風呂へ入つて來たのよ。まあ、そんなにじろじろみてばかしゐないで、讃めて頂戴よう。いゝでせう。よく似合ふでせう　ねえ。木村さん。」と、今度

は金貸しの親爺の方へ向き直る。
木村も笑つて、
「いや、よう似合ふとも。何うみたつて異人だよ。日本人ばなれがしてらあ。はゝゝゝゝ。」
徳枝はぴしりとその肩を打つて、睨むやうな格好をしながら、
「あらッ厭だ。木村さんも口が悪いのねえ。どうせあんたのやうなお爺さんにや、この趣味は分らないわよ。お金ばかし抱へてないで偶にや銀座へでも出なけりや、あんた時勢に遅れちまふわよ。ほゝゝゝゝ。」
木村も徳枝の頭ばかりみながら、
「私やもうこの年だから、それでなくたつてどうせ時勢にや合はねえやね。どうだい、まあ、このお河童さんの不恰好なこと。まるで田舎芝居の山神だね。こんなんをみても今の若えもんは、色氣が出るのかねえ。」
金波はそれを横合から受けて、
「そりやあんた、今はこれが流行だから、きつとこれでなけりや納まらないつてのがあるんですよ。

第一昔の髪と違つて、便利がいゝですからなあ。いくら何處で浮氣をしようが、鬢のほつれつてな粋なことはないしさ。おほッぴらで發展が出來まさあね。」
「ふむ、成る程ね。今時の女あ、そこまで考へてやがるんだね。呆れ返つたもんだ。成る程、かうして置きや、枕の咎もねえと來てやがらあ。××××。××、××××。××××、××××××××××××。俺も年の割にや悪食の方でね、ぜひそのお河童さんに食ひついてみてえんだがなあ。はゝゝゝゝゝゝゝ。」と、徳枝の腰を突く。
徳枝は兩手を火鉢のうへで溫めながら、平氣な顏で、
「×、××××××××××××。その代り、文句を云はずに××××××××××。××××××××××××××。」
「こんな年老りでも承知か。」
「私、年老りは大嫌××××××、××××××、××××××、人助けだと思つて、××××。ほゝゝゝゝ。でもあんた、あんたから××××も取つたら、晩にきつと化けて出るわねえ。あとの祟がこわいから、私願ひ下げにするわ。」

木村も笑つて、

「人を馬鹿にしてやがらあ。笑談ぢやねえ。いくら俺が吝坊だつて、×××ばかしの金で化けて出るけえ。口の減らねえ女だなあ。このいきで洒蛙〳〵してられちや、全く此方がおびえるね。おい靜波さん、受附代つてくんな。とても俺ぢや太刀打ちや出來ねえ。はゝゝゝゝゝ。」

靜波は又煙脂のつまつた長煙管をぐつぐつやりながら、

「はゝゝゝ。さすがの木村さんも、德ちやんにや尻尾を卷きましたね。だが木村さん、この子は口の割に場數を踏んぢやゐないんですよ。これで不意打ちを食はせると、まだ顏に紅葉を散らしますからねえ。ちよいとしほらしい處もあるんですよ。」

「どうだか。今の女あ、昔の女のやうに意氣張りづくがねえから、とても當てにやならねえさ。話が手ツ取り早過ぎるからなあ。全く恐れ入つたよ。×××××××××。×××××××××××××××××××××。×××××××××××××××××××××××××××××。平氣なんだからなあ。」

德枝は、足で拍子を踏みながら、口をすぼめて口笛を吹いてゐたが、又口を出して、

「×××××××××。そんなことを考へてゐたら、私達のやうなものは、××が出來やしないわ。

××をたべなくて、何うして生きていけて。たつた月に二十四圓や二十五圓の日當を貰つてさ。それで生きていけつてのは、無理すぎるんだもの。ねえ、木村さん。ほんとに笑談ぢやなく、來月ツからもう五圓だけ增してよ。私、全くやりきれないんだもの。」

木村はその顏をみて、きよとりとしながら、

「おい、德ちやん。呆れたもんだぜ。このどさくさ紛れに、身上まで居直るなちつと惡どいぜ。お前は辛い辛いつて口癖のやうに云つてるが、その洋服は何うしたんでえ。まさか、洋服屋の店先からカツ拂つて來た譯でもあるめえ。だから俺あ女は厭だつていふんだ。」

「この洋服だつて、やつぱし××××こしらへたんだわ。下着だつて、靴だつてみんなさうよ。私正直に白狀しちまふから、木村さんちつと同情してよ。今時、一日八十錢ぢや、とても食べちやいけないわ。ねえ、靜波さん。さうぢやなくつて。」

靜波は笑つて、

「いや、どうもなかなか勇敢にやるねえ。資本家對勞働者の問題になつて來ると金波の持場だよ。私は情緒ものゝ方で賣つてるんだからねえ。はゝゝゝゝ。まあいゝぢやないか。君なんざ、女だけ

に××方で月賦がきくんだもの。我々と來た日にや、そこへいくと、實に憐れなもんさ。これで家へ歸りや、妻や子が餓ゑに泣いてゐるんだからねえ。實に浮世は味きないもんさ。はゝゝゝゝ。」

「ほゝゝゝゝ。餓ゑに泣くはいゝわねえ。ヴアイオリンのソロでつけるとこだわね。」と云つて、徳枝はそこへ蹲んでしまつたが、木村は話が面白くなくなつて來たので、いつの間にか椅子から立上りながら、

「それはさうと、もうそろそろ「熱血の義士」は上る時分だらう。今日は又馬鹿に廻はし方が甘いんだねえ。頭で一百しか入つてねえんで、技師の奴、氣をぬいてやがんな。仕様のねえ奴等だ。」と口小言のやうに云ふ。

金波も舞臺の方を覗いてみながら、一寸腕時計をみて、

「さうですねえ。今夜は一寸十五分ほどのびてますねえ。何あに、これでも眞打で疊み込みますよ。」と、云つたが、そこへ俄に幕の切れたベルの音が聞えて來た。

徳枝はそれを聞くと、又起ち上つて、

「さあ、今度は私達の番よ。ボツクスはとても耐らないわねえ。今夜のやうに冷えると、手がかぢ

かんで、指が云ふことを聞かなくなつちまふんだもの。」と、いひいひ彼女はヴアイオリンのケースを抱へて、眞暗な抜穴からもうすぐにボツクスの方へ下りていつてしまふ。

觀客席の方をみると、その晩は上が三四十に、下が四五十しか來てゐなかつた。いつになく空氣がからんと澄んでゐて、空咳の聲ばかりが天井へぴんぴん響いてゐる。中賣りの聲も妙に寂しかつた。

徳枝はそこでも樂士達に眼を睜らせた。ボツクスの隔壁には子供や學生達が七八人ぶら下つてゐるので、皆はあんまり惡どい冷評し方はしなかつたが、指揮者である渡邊は、棒を構へながら、小聲で、

「徳ちやん。よう、よう。」なぞと云つて、片眼をつぶつてみせたりした。

徳枝は「天國と地獄」を彈いてゐる間も、波多野のことばかり考へてゐた。それも戀しいの何んのといふ感情ではなくて、折角今夜初めてこんな變つた姿をみせるのだから、何んとかして幾何に し度いといふやうな氣持ちになつてゐた。まだ洋服についたもので、幾らも買ひ度いものがあるので、せめて十圓でも波多野が持つて來てくれたらと、そればかり考へてゐた。徳枝の財布には、そ

の日理髪屋と風呂とボンボンで九十五錢とられたので、あと十一二錢しか殘つてゐないのであつた。

ヴアイオリンが一寸休む間へ來ると、德枝のすぐ後にゐる、やつぱり女樂士の一人である八重子は弓の把手で輕く彼女の脊中をついて、

「德枝さん。あんたもとうとうやつたわねえ。どう、頭の工合は？」と、いふ。八重子も既に斷髪にしてゐるひとりなのであつた。

德枝は後は向かずに、

「とてもいゝ工合よ。さつぱりして。」と、小聲で呟いて、「私、こんなことなら、あんたと一緒の時にやりやよかつたわ。」

八重子は後から寄りかゝるやうにして、

「でもあんたのは、ウエーブが大變によくいつてるわねえ。何處でやつたの。」

「私、私はね、三松軒よ。つい先刻鏝をかけて貰つたばかしだもの。明日迄では大丈夫もつわね。」

「耳のうへのとこが特別うまくいつてるわねえ。三松軒は割りに上手だわねえ。私も今度は彼處へいつてみよう。」

「え、行つて御覽なさいよ。あすこは六十錢よ。でも私、似合つて？　何んだか洋服としつくり合はないやうな氣がするんだけど。」

「そんなことないわ。とてもシヤンにみえるわよ。まるで德枝さんぢやないやうな氣がするわ。歸りに何か奢つてよ。」と、云つて、べろりと舌苔だらけの舌を出す。

德枝にはそれがみえないので、弓を置いて右の手でそつと頭髪を撫でながら、

「私、それツ位な讃方ぢや、奢らないわよ。もつともつと讃めてよ。バンキイのやうぢやない。」

「さう、バンキイよりももつといゝわ。ほら、見て御覽なさいよ。あの特等の右から二番目の紳士が、先刻からあんたの方ばかしみてるわ。あの人、鬚がないと一寸してるわねえ。きつとあんたのその格好が氣に入つたんだわ。早く電波を投げつけておやんなさいよ。きつと手答へがあるわ。」

德枝もさつきからそれに氣がついてゐたので、もう云はれない先から、幾度も此方からもそつちへ向つて何喰はぬ顏で秋波を送つてゐたのであつた。さう云はれた拍子に、彼女は思はずにいツと愛嬌のある笑顏になつて、もう一度無意識に紳士の方を見上げた。

若い脊廣の紳士は手帛を出して、態とらしく口を拭いた。

八重子はクスリと笑ひ出して、

「ほら、覿面ね。だけど德枝さん。あんた、斷髪になつたら、これから今迄のやうに不精をしちやダメ目よ。始終面倒臭くつても床屋へいつて、この後の盆の窪のところをあたつて置かなけりや可けないわ。さうしないと、あの人に××××××、××××××るんで嫌はれるわよ。」

德枝は後から不意に盆の窪のところを冷たい指先で觸られたので、ぞツとして肩を縮めた。その時コンダクタアの渡邊が此方をみて、口を尖らかしたので、德枝は慌てゝヴアイオリンを顯へもつていつて、弓を取り上げた。そして一テンポ遲れて、次の樂章へ入つていつた。

昭和五年四月十五日印刷
昭和五年四月二十一日發行

女優部屋

定價八拾錢

著者　長田幹彥
發行者　島中雄作　東京市麹町區丸ノ內二丁目二ノ一
印刷者　山縣精一　東京市神田區今川小路一ノ一

發行所　東京市麹町區丸ノ內二丁目丸ノ內ビルディング五八八區　中央公論社　振替口座東京三四番　電話丸ノ內〇五三五番〇五三六番〇五三七番

山縣製本印刷株式會社

中央公論社發行書目

（昭和五年四月現在）

ルマルク著 秦豐吉譯 **西部戰線異狀なし** 價一圓五十錢・送料十二錢鮮滿十八錢

谷讓次著 **踊る地平線** 價二圓五十錢・送料十八錢鮮滿廿四錢

ダグラス著 岩村忍譯 **信用機關の社會化** 價一圓二十錢・送料十二錢鮮滿十八錢

今和次郎編 新版 **大東京案內** 價一圓八十錢・送料十二錢鮮滿廿二錢

ソレル著 西川勉譯 **暴力考** 價二圓三十錢・送料十八錢鮮滿廿八錢

リンゼイ著 原田實譯 **友愛結婚** 價一圓八十錢・送料十二錢鮮滿廿二錢

ウイリアムス著 前田河廣一郎譯 ソヴエート ロシヤ **風土記** 價一圓・送料十二錢鮮滿十六錢

大宅壯一著 **文學的戰術論** 價一圓五十錢・送料十二錢鮮滿廿二錢

堺利彥著 **貧富戰と男女戰** 價一圓二十錢・送料十二錢鮮滿十六錢

貴司山治著 **ゴー・ストップ** 價一圓二十錢・送料十二錢鮮滿十八錢

高橋龜吉著 **日本財閥の解剖** 價二圓五十錢・送料十八錢鮮滿廿八錢

中間物選集

柳澤健著 **巴里を語る** 林房雄著 **都會の論理**

石川欣一著 **山へ入る日** 小島政二郎著 **場末風流**

淺原六朗著 **都會の點描派** 片岡鐵兵著 **彼女等と語る時**

新居格著 **近代明色** 下田將美著 **東京と大阪**

ささきふさ著 **或る斷層** 酒井眞人著 **映寫幕上の獨裁者**

下村千秋著 **月寒の女** 長田幹彥著 **女優部屋**

丸木砂土著 **變な笑ひ顏で**

定價各八十錢
送料八錢鮮滿十八錢

東京市麹町區丸ビル五階　振替口座（東京三四番）

603
126

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black